日間瑣錄

三

大正十四年四月上院起草

特別
イ4
1919
371

176639

日清談録 三

大正十四年四月二日起

○昨今横溢の流の如き切支丹宗門の迫害と激伏と題する史を興味を以つて読んで居る、日本に於ける切支丹問題は、天正から明治までの長い問題で悲壮な多くの犠牲を払つた大事件で、単に宗教上の問題だけでなく、徳川氏の外交政策もこんがらかんでゐるから、その大問題であるが、これ迄あまり研究されて居ない、歴史上の問題としてその政治上と問題に関係と関聯とを別切にして考へる観がある、何百年もキリシ

家本中
龍文
家物

38- 9160

ダン、バテレンと云(ハ、)、國民に畏怖の念を與へたるものにして、之れを口うるさく喚起の種とするに為あり時代もあつて、住び、楽んで湯く頭脳に浸潤し、研究家も此の方面に觸るゝを不快とし、又氣味もある、追ミュンナ事に研究の歩を進めんとするに、今日の秘する時勢あるのみ、さて研究家が困却するは其の資料の無きも乏しいことである、邪教禁止の結果、邪教に関係あるものは皆やきすてられ、ゼシイットが日本に来ていろ〳〵のことを敢てしたるに伴ひ、何もかも皆焚かれ、斯る書類のあるものは疑惑の種となるから之れを所持するものも不安のあるに自ら焚き棄てる

位だから、斯る書類は存在せず、唯だ邪教を取締ぐに就判定数隠滅者の也数の也又宗旨府や其係り官、又は人の家に存在してある筈だが、それまでは無くなつて了ふ、斯る書類は特に不浄食く人の置くが例とする所、深く閉して手をつけなかつた、それの維新の革命の時まで焼き棄てられた、又古文書に関する資料が、明治の大切なるものとされ、禁教時代秘密に所有するものとされ、明治時代に於ては、此の事の使命をなすものとして、如きは此の事に関する資料と、しるのは、幸ひ長崎の図書館と為したるも、数其他であつて、これが此の問題と家の名称を

投するものゝ実に貴い材料である、其目を大略挙げると

甲

一 寛文二年作事奉行保田若狭守改後の誓詞
二 延宝四年大目付北條安房守同上誓詞
三 異国船来見申す書付
四 宗門禁制並に外国船文言に就ての制れ
五 宗門穿鑿式
六 蘭船二年及四年オランダ船長参殿並誓詞のこと
七 宗門穿鑿心得のこと
八 吉利支丹宗旨奢り、筋
九 吉利支丹出申国所之覚
十 伴天連根絶始末並に外船停止のこと

十二行

十一 筑後守伴天連不審を掛け申詰めころは七申候論議
十二 筑後守伴天連宗門の者共に白状させ候條々
書付指上げさせ候條々

以上八二冊の内の上巻の内容である、此書類は黒川真頼の花本目の写本を国書刊行会の後々羅山類従に入れてある、藤田李花所花月も略々同様のものがあるという

此外に耶蘇教書籍目録の内容は大略左のごとくである

乙

一 耶蘇宗門軍書抜のこと
寛永十年のこと

二　暦覆出

三　宗門者習慣ニ付テ有司の覆出

四　マんチリヨの勧め（覆出原文ノ通）

五　マんチリヨの心得

六　ドミニカ板書（祈禱書）

七　西援論の一節

八　佛法の次第服板書（破佛論）

九　神道のるす（神道ハ生殺の力を掌る）

十　マんチリヨの教と断しあり

十一　おらーよの教理附きりしたん教の條（同答申）

十二　けんと

十三　ワンメンシウシ十ケ中（或ハ親分字者十ケ條カ）

十四　オラシヨの功力

以上甲乙の二種類の甲種ハ官司側の古類ニ属シ乙種ハ禁教宗門徒側の古類ニ属ス、珍とすべきハ宗門乙種ニ於テ、先ヅ甲種ニ就テ聊カ叙述すべきガ北官文書ハ禁教ニ切勘ヲシ井上筑後守ノ実験録ヲ経テ、其後を追ケる北條右京守保田美作守の取扱ツタる古類を沿用を正さず採録しタるものなり、井上筑後守ハ島原の乱ヲ引つき禁教の責任ヒとり、二十年間西を注いて拷問の衝に当りタるものなり後後

者に範を貴しとするものあり、宗門宗教式、宗門宗教心持のみ、伴天連、不審をかけ申候、こ
うばせ申候論議の三項の如きは、筑後守の長い実
験を得たる心得書なり、拙者大切なる材料なり、
邪教と雖し市初は現世の掛引、公判なれば拙刑
に行ひたるなれども、筑後守は其の非なるを指摘
理窟法を論破し或は他の誘掖手段を以て屈服
(所謂轉ばせる)せしもの、こと日の方針に改め、是と
切を好結果を得たるなり、後進者も皆其方針を
踏襲したり、即ち前と書に出したるの漸やく寛と
なりたるは筑後守の実験なり来りたるなり実効い寡
ろこれに依て得たるなり、乃ち誘掖を特いせ、これを利用

十二行

して其悪徒(掛孔弾)に対しては其一例なり毒あの如き
は特に筑後守の片腕となりたるなり、宗教式といふ手
あり、禁教者に理窟法を以て説く其の論難の大
要あるを説きたるなり、乙の書
類は信徒の秘密と取扱したるものなり、
が、此書類の内面きは、マルチリヨの勧めマルチリヨ
の心得式はマルチリヨの鑑なり、これを殉教者
に対し有司の紀律を恐るゝ勿れ、苦しめんを慕と
死を得るは神の恵なり、現世に於て苦(苦)あれども
後は楽園に導かんと激励したるものなり、佛法の
破邪論なるものは佛法といふは猶絶対(大日の三
佛を称することの貪瞋癡三毒に外なる

すと罵り、神道と唱し、男女の生殖力を崇拝
するなどと論ず、此の出数の内を毎年の者が受束
なき節を以て書きなるもあると云くど、邪教側の
申條を見るに大切なる材料なり、
井上の宗門宗鑒式の内注意を拂ふべき二三の
個条あり左に抄す
七 親が支利支丹宗つの由訴人御糺ありても其家
子、兄弟に訴人之なく候（只、其子兄弟に
比方を構ひ申さず候、但し扶子なり、但し扶子なり
切支丹宗なれば之なき候や、尋拂ふる七之
あるべし
八 何様の科人なるも支利支丹宗つを訴人候

十二行

八 斬罪御赦免なされ、其所出さるべし
九 吸問の上にて訴人仕らずとも、つるさん、くるし
又のうへにて、紙きしものを一人にても（致の格
うなるを）訴人いたし（只、死罪御赦免
但し義を止し、其品ことに申さる
十七 吸問を頼しいとなる悪く候、奉行習を
打りしも、切りて詳細に口書を申
付け、色々思案いたし、手を回しさぐり
尋ねること専なるべし、或は宗門をかくし、
又は教門白状いたさいる時、拷方つきなる時
吸問仕るべきなり
七十七 井上の扱の漫りなる者に偏にすることを見る

べくハ九世界と禁数授業と重きを置きこれを見る
べし

宗門穿鑿心持の事　その内一二注意を要する事
り左に抄す

二　うば茶と世五ハ、テウスの踏絵をふませ候
（ハ、上氣さし、かふりものを取捨て、息合あ
く、汗をかき、又ハせしようそい人の見る様
に、鄙俗をいとゞき、るもこれある由

四　ちみさきイマゼウ（彫像）を脇指の柄頭へ
堀入れ、又イマゼウ、仏天連の骨灰をもを
抱の内へ入れ、焼物香炉の内、炒り薬な
どの中へ入れ置くるあり、心付べきこと

十二行

十二　穿鑿の時初日「宗つ者の」何を少くこ
とあり、二三日も申すべきはかり少き、其後
安原くしよう、不審をかけ見るべき由、念
比に少くこと之なく、辛酉に不審をうち、
論にいたり候事多く、宗つの者は
かなつち論（あうけ論）にて、こし、事を始め
其内五三後世の事まで論をいたし、双方共
に論相つきかたつち論はうけ候へハ、已
きようなきこと、奉行の誤の様なる、家
来まで七去利支丹宗つる道理之ある
様に存ぜ候へハ、大悪事にて候、去利支丹
邪法は、為仏はかりと申、人を迷はす

候而、道理に詰め、法人が邪法と存ずる
やうに仕なす候（心、下々家来家業の役
人まで、存ずるべき体にて候由に
事、

十二行

十二にて、すべて所に有司の秘法にて、高橋紀弥
の蛮行に漢学者の人にて来世のまつに拘着なく
唯に一偏の道理をもて宗門の主張を論駁せし
に過きず、往々禁教者の言ふ所、人の同情を
惜しむこと無きのみ、元有司に取りては、
禁教の事、事両側とせん、外の論と云ふ様
殺すを推一の手段とすべ外にすべきを推す

井上が才能を以て論駁し信者を勢ハせん其の論旨の
大要ハ大体漢学者の論ずる事実的理想
を加味し居る利、其の勢ひ強盛と信じ已
むに至る所、実ハ権威を信じ已
に改宗せしめんとする事を直に浄土真宗の
邪教徒が陵辱する或国の遠藤を脅迫し、
北宗を信じ、実ハ心の働きこうんべ大多数とせしかた
き筆に、去れバ維新の際に浦上にけて三千の信
者の潜伏を発見し、続して北の邪教ハ
初め九州と根據とし、遠く全国に蔓延
し東北に至るまで、人くに接かりとる事実を見
て、姉崎の見りとる分布図に徴する所に、東北に

南部、会津、白河、仙台、山形二本松等ハ信徒殊に多
数と指摘せらる、是亮東北地方ハ人文開けさること
勿論思想ハ容易に入りしこと、九州中国辺に多
きハ長々続きたる戦乱に困しめられ人心の自然に
これを厭きたるものと謂ふべき歟、
案頭に和田洋モンタヌス日本誌あり、蘭使の禁
教に関する酷刑の事を詳説す、蓋し蘭使の
目睹を記したるものなれ、外国に通信したる事実を
と日本に聴取りたるとを参へ録したるものにて、井上
筑後が事に当りたる以前、即ち酷刑を以て吳
教徒に臨みたる時の事なり、地獄の外数種完
と雖も是参考すべき要あり、

十二行

今たに吳教徒に最し特に案出さんとする峻酷
の刑を條列すべし
一　徐々直殺する以外に地獄の熱湯を用ひ
硫黄を含みて熱湯
其の力を言
峻しき山の林麓に湧き出、
と観者をして震駭せしめ、室息せし
むること如きの苦汽を天に昇ること
一　地の沸騰する熱湯の中に裸体にして投
ハ、而要数を指ひたるの山頂に送るなり
熱湯の湯海中に投せらる
一　赤熱の鐵を以て烙印せらん、鋭き刺を
以て刺さん、晝ハ日光下に裸体にて曝

さん夜ハ浴槽ニ曝さん、又蛇の入る盥ニ
投ぜらる

一　異教徒の為親ニ目薬を施し其兒を傍ニ
置きて晝夜苦しまむ、小兒ハ父母ニ憐
をこい棄教を迫る、為親此の悲鳴を
聴くに堪へず、衰傷の為ゆえ死するもあ
り

一　或ハ手足を抜かん手足ニ鎖を孔を穿ち
或ハ両手を後ニ組ませ仰臥せしめ上
ニ強く踏み踏みと吐出さしむ

一　狗数者を縛ばしめ腕を胸の上
ニ十字ニ組ませ身体を後の柱ニ緊縛

し後手足の爪の間ニ鋭き釘を刺し
ゆゆ、北阿吉を五日の以上も反覆す

一　婦人を蛇の入れある盥の内ニ容れおきて
るに、蛇ハ陰部ニ這入りて腹内を食せ
ることもあり

一　横棒ニ罪人の脚を吊り、其頭を井中ニ降
す、井の上ニハ横棒を置き、其端ニ滑
車を附して縄を通し、之を被責者の
足ニ結びて井中ニ下し、足の見るまで
沈む、北苛責ニ堪ひなるもの、云く、腕腑
ハ咽ニ下りて口ニ出でんとするがごとく
悪心無ハ眼口鼻耳ニ通り出つと

一　十兒の顔を以て劉しく毋の顔に打つく
る珍刑あり

一　燃る炭を手に置くことあり、之れを投棄
すんハ、日本の有司ハ基督教を否定せ
る徴なりと宣告して棄教を誣ち

一　竹筒に硫黄其他の燃焼すべき薬品を
詰め、異教徒の口を塞きて筒の端を鼻
孔に挿入し他端に火を點ず、之う為めま
堅茅ハ顔面の皮膚を剥脱するのみ
ならず、頭部を深く火傷す、

一　火の四隅に立て四本の縄を締結して異
教徒の胴を縛し、縄を以て彼等の身

体を攣げ、高度まで引上げたる後、一時に
縄を手離して殺害を地上に墜落
せしむ、之れう為め大抵絶命すれども
之れを蘇生せしめて而の責を塞ぐ

一　犯者の家を封鎖して食物を給せず、
或ハ海濱に囲をして其内に犯者の家族
をおしこめ満潮に身体を没せしむ、

一　犯者を緊縛して眼を鑿ち切り、又鋭き小
刀を以て頸を擦り、傷口に塩を振りこみ
苦痛を大ならしむ、

異教徒に節々二天主教なる秘密結社ハ甚だ峻烈の手段を
極めたりとなすも或ハ信し難き程のものあり、或ハ外人

の誇張もあらんと思はれど一時峻列苛酷の横門法を
取り行ふ疑を容んず、後刻の横門が白狀を促す名
法のあるべきと勘づきなれば井上筑後守に木馬に犯者を
載せ御に重き石を置れしむる横門法を設くるな
りなり、

四月三日記

○四月三日神田の古庶に得る古籍の二三を録す

一長慶宣明暦　合一冊

永應の年安藤有益の序あり宣明
暦の日本に用ひられる沿革を叙す
元亨宣明暦庶の稿案の時徐日昇と
元人の作なり、古慶壬寅の著らし

世に行はるゝこと七十四年と云長慶
宣明暦の名あり所以なり、日本に行はる
るは洪和天皇貞觀元年新渡の遣
唐使を献ず三年に用ひ始め八百年間に
及ぶと云、假名交り文にて某宅法
具り、暦書や有名のものと稱歎
のとなり其後の版にて六冊合本
也

一三樹考　一冊

中山田典洪著松屋叢考の一也、古記
に載せの樹名の由縁と左の三樹を考証
したるものなり、挿図もあり一種本巻也

とも見るべきもの

三材といふハ男木ハ桂、楠、樅、廣心樹

などの名、加賀良乃木は樅木

厚木などの名、樅ハ天竺桂の類

の名をもれハ、ふの三種をとり出て

説を立たり

文化九年三月版元なれ今ハ獲かたき也

一黄帝蝦蟇経　一冊

北書丹波元胤文政年間衛生彙編に

かくて刻する所也支那に入りて逆しとな

醫書也、隨往清往藉志に目を存

するのみ、白河藩家の巻子

本ハ和氣氏の傳へなるもの、その銘

本なりと丹波元胤の説の後に見ハたるく

支那なる月中に蝦蟇ありと云ふの俗説

の説なれども、説行はれ、之れを援り医法を

立てし時代もあり、月の盈虧と援り灸

點を施すべき所を定む、元北の説の大

概なる、月の盈虧の圖を畫し蝦蟇交

々其の支体を追て現ハす状を示す、月

下二人の裸体圖あり灸点を施すべき

所と否とを示す、假托なりとは云へども

明道家一時根月の盈虧に根據を置

きたることと知るべし、元又一珠書なる

を失ふす

一、十六羅漢図果後見頃　一冊

北書貞享年間刻する不十六羅漢の図像に各頌を附す、羅漢は十六國の達者を選びたる也、巻首に花仲淹の序あり、仲淹北の經を得洛陽に流布し氏に問ひ知るべきなり、珠者とは刻すとあり、普通十六羅漢図像と異なるものあり、原書を深しとなるは天竺法門開那多加といふ、

四月四日記

○モンタヌスは其日本志に羅馬教が日本に流行

十二行

せし原因五ツを数へ、

一　エスイト流は貧民懐柔を專とし救貧院を設けなどを以て貧民未衰のものを庵者等多くを之れに新付り、然れども斯る侵徒を得たる面白からずとなり

二　候伯の貪慾は一原因なり、葡人は船に代へ物を積み海運未だ為の海運の大元ハ其の利益を得んと欲し、特権を欲し、特権を エスイト流と異なるもあり、船長はエスイト教徒の指揮によらざる船師すなり

能はざるが故也

三　日本人は好る祝祭を有し、彼等は之れを業として理学を教く日用大切の子を設的し、農産のこと、満潮の満干、地震の理学を説き、其の満足を得しむる也一因也

四　日本の仏僧の暴虐なる其の放蕩飲酒婚淫の失態は日本の細民をして不満を感ぜしめつゝある折柄、日エスイの流は逆に深切に出づるを以て其仏徒を得ゝ

五　仏教と加特力教とは類似の點あり

十二行

す内意は羅馬法王似て居るあり、仏僧院あり、僧侶を収容する同し、羅の為は身体を四方に散する同し、教る家流に従婚を拒まる同し、仏僧と異し慈善を施ハ未来の幸福を学ぶと信ずる同し、其他も類似点あり

○祝祭と学者共を業の事ハ仏教の場合なるに其の主ハ全く家長、家長とあんぱ父兄の三分の一にあるまし祝祭と為る人の父兄もるハの現象にあるも、教会に後援ハ仏教の新法にあるも、法義の洋制と事同

劇場を人々は我が国の劇と異なる所の劇場
又は方がどこまでも立ち雑ぜよおもしろい新しい新しい
きゝ、今までの新聞を世界中にて見べき大幅の
ものである、隅々に皆新聞も大きくなると得ぬ多くの
役者が新聞を上に掲げて、新聞を感ずる、新聞
のかゝることは二十年前も昨日の如く
御覧なる者は、何人ひとり眼の前
変化の面白さを見るから、北の新聞
北の新聞を見て
北の新聞を見て
と云ふものあるから、保守の新聞を湯呑
本位とする人は自然大人を
この内「輪」を出して
この時代錯誤でもあらう
が、実に北の新聞を相応する人もある、大勢が

十二行

料劇観御

一番目
高安月郊氏作
ゝく
ら時雨

中幕
河竹黙阿弥翁作
貞盛宗元代秋

大隈摩連中
一幕

十公爵内
歌舞伎
一番目
高安月郊氏作
松居松翁氏作
舞台監督
新吉
ケ原

大隈摩連中
一幕

中村歌右衛門
市村羽左衛門
三幕

前売券
御利用
銀座
電話
五五五
二二八
八一〇

円円円円円円
五四三二一座
等等等等等席
一二四七九拾

木挽町
歌舞伎座

中市中中中中中中市阪東
市川村村村村村村村川東
中福家之丞丈正太郎右衛
車助橘丞郎郎郎郎郎郎郎郎郎羽之

寅蔵
片岡川千代九十
左衛門若助藏郎十左

市市片片片片片片片片
川川岡岡岡岡岡岡岡岡
新我代代千千千千千千
藏郎十左壽藏郎藏郎藏

中阪中市中市阪片
村東村鶴亀秀市市
羽右衛門藏藏調藏門

中市市市市
川村川川左
鯉松芝松壽團次
鶴鳥藏

十一亀三郎鶴鳥藏

歌舞伎座
花見月の歌舞伎座

曽る四月一日より毎日午後
正三時三十分開演
初日より限り三時開演

歌舞伎座

歌舞伎十八番の内　暫　一幕

新鹿島社頭の場

大薩摩連中

新鹿島社頭の場

平親王將門實は伊賀壽太郎娘春駒
鹿島入道雷玄
御厨三郎將賴
蘆原四郎將平
村岡五郎義秀
武藏九郎興世
猿島平太
船沼八郎
飯島軍藏
小山千平
香取錄八
布佐十平
笹川宗七
八幡市藏
奴
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
常陸之助雅近
左衞門佐維衡
下總介義廣
貞盛妹桔梗前
侍女睦月
同　如月
同　彌生
同　卯月
同

歌市九鶴新龜七歌鯉訥芝千調筵若門成中梅新太壽雁二鶴か福齋改め權村福千芝福龜
右　十　百五三　右衞　榮　右衞　二　三　太　太　之　も　め三　右衞　之代喜
衞門　藏藏郎藏藏　郎郎門賞藏門八松郎彌郎男郎郎若助多め助　郎門亟壽松枝松

公綱妹ひさご
渡邊小金丸
後見
仕丁
同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
口上
館金剛丸照忠

秀家羽市橋羽二鯉若千か目み大か市錄橋う十調雁河美松鶴蓮又万千駒勝蓮定中羽
太　家三　壽三五　代も次か　ん　之ぐひ喜太　太太三　二次　代子次　左衞
調橋藏郎咲藏助郎松長め郎ん八八平藏助す知郎若郎郎多郎郎藏丸郎次一丸車門

新鹿島社頭の場　舞臺は廻廊にて紅白梅の釣枝、管絃にて幕あくと渡り拍子になり奴が出て吉例のせりふあり、家臣等は今日主君將門實は春駒が御位定めの式日の祝言を述べる。と、爰へ常陸之助雅近、左衞門佐維衡、貞盛の妹桔梗の前、侍女何れも虜の體にて連來られる。常陸之助洛中守護の大切なる身をもつて山鳥の名鏡を失つたのみか、また桔梗の前は將門の意にしたがはぬから大罪人、そこ一寸も動くまいぞと云ふのであつた。

やあぎやう／＼し靜まれの聲あつて大薩摩になり、愈々將門實は春駒が金冠白衣、瓢簞附けし梅の枝を持つた女鈴大拆を抱へたら鈴坊主を控えて押出される。家來が吉例の臺詞あり、さて雅近か、兼て御尋ねの山鳥の御鏡は御手にあらうがなと將門に詰寄ると我に向つて慮外者此場に於て成敗なし神への牲贄に致さん、それとも我に随ふかと答へて、とゞ東寄に控へたる武藏九郎を呼出させる。と、お召にしたがひ一陽におつ開いたる寒紅梅、赤いは顔のしやつつら見世歌舞伎の春の吉例に是まで伺候仕つてござりますと九郎あらはれ、さて愈々雅近達は斬られんとし、將門實は春駒は大盃にて酒をのむ。此時向ふ揚幕にて、

しばらく／＼、の聲あり、皆々やあと驚き、何やつだゝと待つ所へ、なほも、暫く／＼と聲かけて、大薩摩でいよ／＼館金剛丸照忠が吉例暫の拵へにて、ありや／＼の聲よせの中に出て來り、吉例の長ぜりふあつて、伊豆と相模の鼻の穴へほふり込むぞとホゝ敬つて申すと納る。それを無禮な奴と云つて家來共引立にかゝると暫は舞臺へきて吉例の元祿見得あつて、さて、紛失なせし山鳥の御鏡の詮議なすには、それより先づ差當り將門公金冠白衣は何處からの免しがあつて着さつした、即位などゝは片腹いたしそれ聞きたいとさあ／＼に成り、誰だと思ふゝつかもねえ、紛失なせし山鳥の鏡は赤いおぢい達が大方ほつほにあんべいからおれに下せへ手へ／＼しやせうといふが、敵役たちはそ知らぬ顔。と、汝らが知らざあ上座にござる將門公が知つてござらうと照忠寄らんとする。直ぐどろ／＼に成るから敵役たち、なんと御威勢を見たかと威張る。をゝ見たく／＼平親王の御威勢も寶の在所も殘らず見たは、と照忠が將門實は春駒に立掛かるを隔てた女鈴、その御鏡は私が爰にあづかつてゐるわいなあと錦の服紗に包みし鏡を照忠に渡し、身にも應ぜぬ役廻りお前に渡せば私の年があいたわいなあと云ふ。さては廻し者かと敵役達取にかゝるを照忠早くもそれを雅近に渡して目出度がり、鏡が出たからは何れも様の御供して立歸るが言分はあるめへなと、大薩摩の淨瑠璃のうちに雅近たちは皆向ふへ入り、照忠また行かうとするを仕丁達やらぬとかゝる。それを照忠大太刀にて一時に首を打落し、弱虫めらと呼び、やがて、さらば／＼と下端になり吉例の見得宜しく。次で幕外、照忠太刀をかつぎ屹と見得大太鼓入りの鳴物になり勇ましく向ふへ。

[illegible]、「暫」と云ふ擬大人物と云ふ、金平のれきし小擬大人物と云つて、此の者共もこんこんなるが、折り合ふと云ふも日本式劇の物の見地が、あらしむる所である、コンナ劇へ今と云へば理解し難い儀なれども、其の男性美的とつて高く切る、馬鹿ばい劇の動作、刺の印籠時代、さえハ云へば、其人に以時代のおもしろい、武張つた所の世流行ある壮士の間に潜伏者と歓客と歓客と、自家友人をせつて歓客が、えを出あり七年ヤンくと難し立て此豆之怒、次の事を思ひ金平本ものの流行し此時代

[illegible]、何の為に義侠心、勇壮を振ふなと云へる此時代を思を浴へると、此の骨董的劇に一種の味があり、理屈一辺倒の今の時代の脚本より優れる所多あり、コンナ物をもつて芸者と酒を呼んで一杯を飲む所が、今は昔し行燈や手鉢を劇場へ持ち込んで自炊しなう氣分と酒に新しく見出をした次の事を追憶した聊の興を添る外に、夢間と忙しるき心地を刺す辛一杯を呑まうとの事が酒宴の不手際陽であらう、自分も其の流流と屠し「暫」の芸が[illegible]、陶酔の前時代を懐しんで歌の

自動車を走らせ、この別荘の石階を登りし

四月吾妻の雪の有様

の美味なる一杯を傾けて酒をうるひ

北記をつくる

○ことしはいつまでも寒く、七重や桜の蕾ふくらみあるのし、あるひは雪が降のうち雪後ちらつきの如き度冷がしてちらつく如、花をうるまでの、恨を捕へんとすると、さくらの事がいろ〳〵記されてあるやうに歌句の如き事、今もそれをおもひ花を待つ心とす。

四月廿日記

十二行

一もろこしの人なるひやみ夫人のよしの山の山さくら花　真淵

一桜は全盛の頃、紙ふぶき、光時ん南考人にうちこ又ちる風俗、行末はのの外くはくの一點もなき花ちる　井上　ち花譜

一歌ものもはもとと思し夫人山

一顧くは花のちるを春死ちん事の如月のもち　行

つきの頃　西行

一ちる月も雲のよそなるうきめぐる、花ぞこのよ

の光ちりける　俊成

一奈良七重七堂伽藍八重さくら　芭蕉

一うらくとのどけき春のこころうらにほひい

ひとり山さくら花　真淵

一 深山木の芽の桜とはみえそらし 桜ハ花にあら
ずにけり 藤氏

一 さくらをばちる後所にしてなぬ花ハ寝ぬ鳥の心
よ 菩薩 花の日の前也

○自分の名前も年数と伴ていくらか変つて来た大好
物の肉類が漸ゆく分られるようなる、軟うるうるものを
食もれ選ぶやうになつた、

羊羹
鰹の白焼 醤油
きぬごし豆腐 神戸のハンペン
ホットケーク

十二行

廿鮒の一ト塩 小鮒の子ずし 鮒の煮焼
ぶりのつけやき 鮭の納屋麦
ラレンジ エチゴ 葡萄 葡萄酒 西八
うど アスパラガス 茄子
七面鳥 うづら
東坡肉 支那料理の内
このわた オールドーブル 西洋料理 前菜
やき味噌
大根の味噌漬 粕漬
胡麻豆腐 小豆
豆のスープ
牛乳で煮た粥 菜めし 鮒めし

本日の子の塩辛

塩鰯　紅茶　リプトン

スタウト　ビール

おろしナマス

酒は特製の白鷹に限る、すべて甘口を好む。

○近著「隨筆頼山陽」の廣告がヤウト一二の新聞に出て居るが、責任がよいうるいこの、そんなことはまづ論説が少事ぬ若者いろ〳〵の行動のから立ち新聞でうの人に等焼しの其の結果に就て是までの著述に殺べるとこれが第一に頼る興味を感ずるといふ来る向きが多い、大体話はいよい方ひある、保し知人のいふことは鍵師でもいのうもも責任と影響のもの美と責任

十二行

に関係するのの出版部の心理と営業とである。新聞ひ之れを後人に拵部は、ひとく面白くこんなるバ也ふるるこ、骨折甲斐があると、いつもの抱腹主義を忘れて、不思議と越を持ち宣伝に努力を悦めに、此の努力が相市に効を奏したる夢の夢なるのも知れぬ、自分は唯に産み出すばあとのどうでもよいのひ、其の生長の世話をする義務も無つに譯だが、保し新聞産み出しに、ものが八こも知れず失折して兼い出らるこも面白くないから発育生長を望むこ於て版元と同感にるとを得ぬ

四月八日記

○改友舎の編載者橋か編載を辞するとれこ内閣失如をも辞し編載に田中義一夫妻を撫き上げしことは

世間政界の視聴を集めしめて、内閣の三派協調や政友会との前年や政友会との関係等と重と政友会との関係等と就てりろくの揣摩臆測が紛起してゐる、どうせ何等うの波瀾を前年に起す種蒔と相違ないが、そうる紙幣差換の裏面はどうかといふと、高橋は金があるのと紙幣をまび撓き上げたのであるが、金が来れば只の人である、彼れも最も早や彼れは只の人とりつつ、彼れの変遷をつくさんは真因はとして社る、然る所田中さんは金があることいふと言ふのもんに
は賊かがあると浦島面はいふてゐる、彼れも政治野心のあることは風くに知れてゐる、且つ一種陰険な手腕も持つてゐる、彼れが野心をいつも達せ

人とうとんら輝を田野へんと心掛けたとまれが金は出来る筈である、軍人は年武弟だ、金に縁がなくなるとの事がなくは弟へ行くこうとあつた、富豪と主の中人でかしは出るまいことと心ごはんが、金を得ることもはなくなることがある、田中は内閣変遷外な大金をもつてゐると云ふことがある、政友会が新党をえんと迫くるのは表面は表面真実は金故である、これが政友会の政友会たる所であるが、而して内は政友会は婦婦と一般、金のある内は肌身を離さず、金うあとくれば、ヒジをかはせる、新紙幣も金故と迫くらうとまんばいらんも亦他の高橋と同じ運命と出会ふ相違なへ、

四月廿日記

○坂口五峯の遺稿の編修が坂森神海の手に渡り、漸やく
運び近の印刷に運ばんとするに至つたので、卷尾に是非余の跋
を乞ふことになつて、仕方なく、神海に代りて拙しく其初稿
を左の如くしたためる

五峯坂口恩道既沒、哲嗣士文、整理其詩題曰五峯
遺稿、請四分書屋先生校訂付梓、屬余爲跋、余
與恩道相交四十年、趨向雖異、然其所操守未始
不相同也、故知恩道者莫余若焉、恩道少壯卓犖
不羈、古讀書尤精史學、至晚愈篤、好作詩、雄
渾新麗、盡棄浮靡而敦厚之意又至矣、自
德川季世以來、詩風大衰、台明治中葉、一時
致盛、未或亦稍〻衰、演于泯滅、能自奮拔

拔以追于古者、獨書屋人耳、恩道從之、具爲屬
稿、招開詩境、書屋亭推重之、故以其就世、
爲詩運之一厄、嘗矣、然恩道生以詩人、傳云爾
哉、恩道抱經綸之才、痛憤時事、傾產結士、
風若大隈侯所識、入其政黨、遷外令、洞大而
舉代議士者七次、議論侃〻無忌、軟態、低清
低俗、有後、尤盡力四事、天成、恐尺、親賜玉書、
遞至、錫勳、動位、北海尋常之所比擬、惟身多病、
不耐勞苦、事功之所以不得大成也歟、豈不惜
哉、顧將于揚雄之林者衆、左之中黃之位者
不安、曾不與、仲木同腐者哉、希恩道乃能
樹立、雖不遂其志、然其詩之可貴、固不能自

掩、然則思道之徒不行者其亦將在于斯乎、余
乃歎青屋一尼之言、不覺隨流之沾衣襟也、
刻既成因書其後、

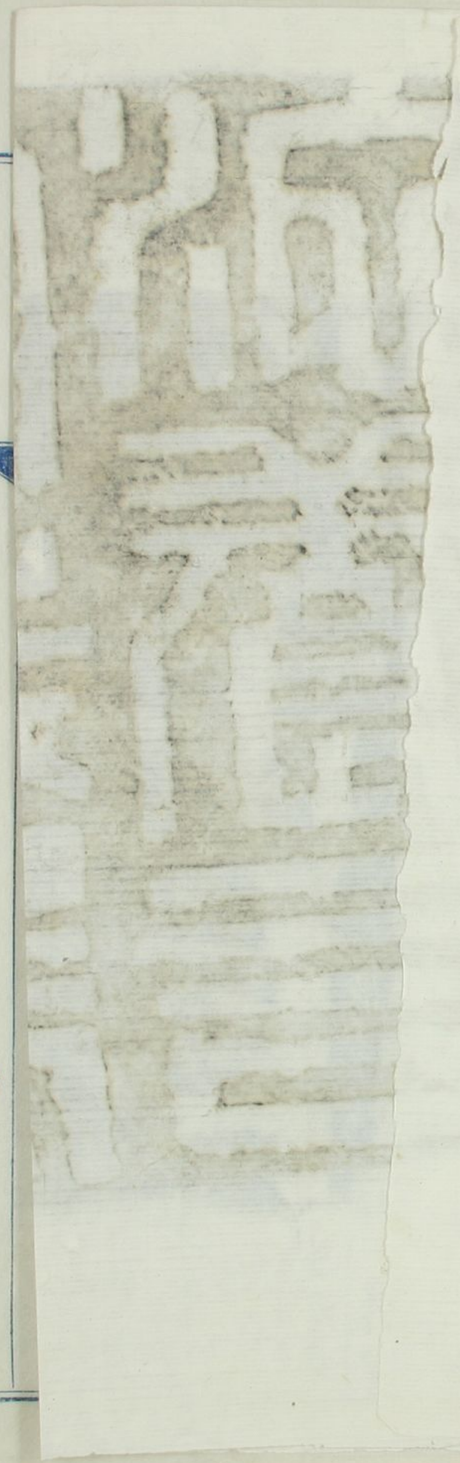
○楠瀬恂也、こゝ〻支孫麻の子を作ることを試みたと
いひつゝ、麻の子を作るまいりくの法あるこ
とを列挙し、今偉こんなんなしてみる、こゝに、スリ麻子
を作る一種の道具である、こゝを馬の毛を縦横に
仮令七、毛と毛と接する所を漆で留めた絹である
が、先づ此の絹の一面に墨を點してこゝを布帛の上
に押して、絹を其儘押さ[illegible]毛と毛の間に絹の真を
すりこむ、これが昔しこゝ孫次のスリ麻子を作る

十二行

法で、絹を取つて見ること錦繍した墨の線、縦横に
あるこゝを異にした色がつくのであるから麻の子が
出来るといふこと、其今日迄次上代の墨流しの事
こゝを語り出だが、楠瀬氏の[illegible]ことを研究して
みる、彼の語るのに氣の付いたのは一時の斬
新面に紅紫青さまざまの色を以て波紋のこと
きこゝをつけて装飾としたことがある、ウエブスター
の大辞典にこんで装飾されまんと帙の斬
新面にこんで装飾するが是法とこゝてみた、そして
こんな墨流しと同じ方法で、矢舟に彩る絵の真
をまた公ハセ(至き)本の断面をまゝ完き迄入で
色を受けのしたるのと云ふ、これを日本ひらやると

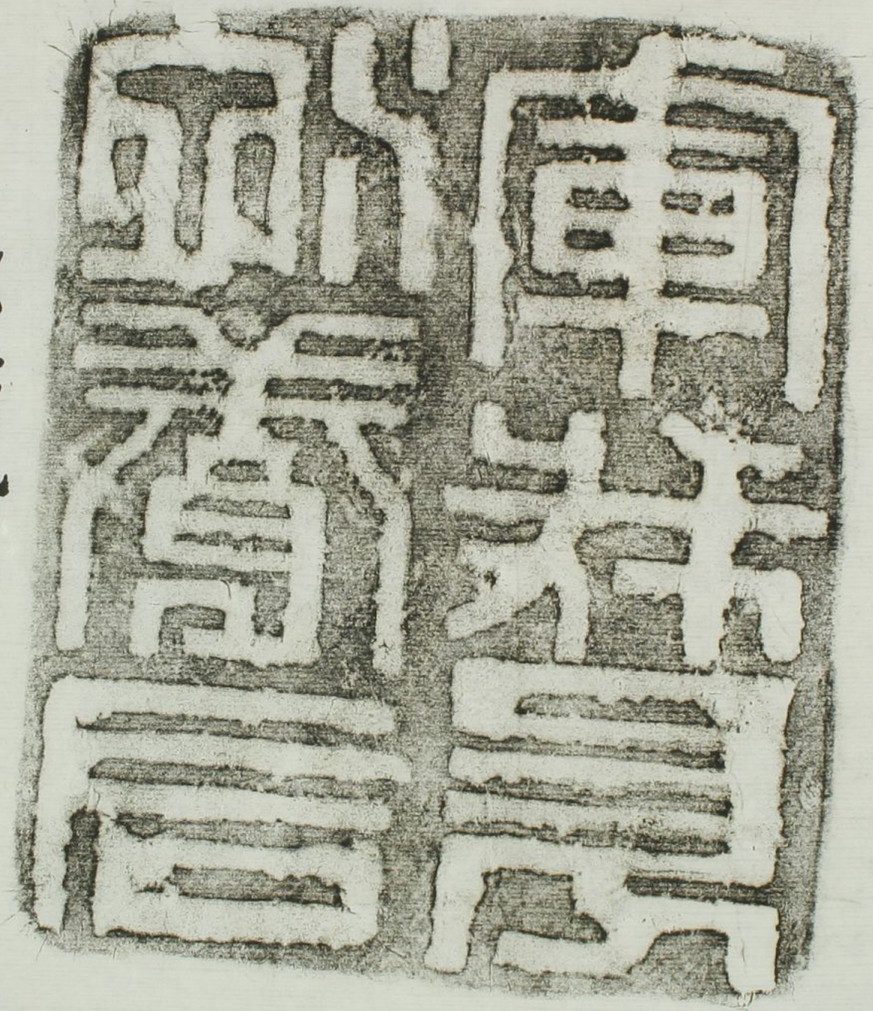
が洋法とく云ハ墨流しの法ハ日本特有とも云ハ云ひ
難いかしらん、朝鮮ハ日本と同じ法で型紙に一種の模様
をつけたのがあるといふ　四月八日記

佛像の古畫を複寫する術も漸々進んで来
たと楠瀬の孫つた話の内ハ神戸の光村が複寫
した佛畫の金泥ともいふものハ古色があるも
言ひ難い味がある、それでどうして此の古色が
出るさんたと訪ねると、金泥の中へ煤を
入り交ぜたものであることゝのことゝいふと



初代 脇賜春人制作陶印

文日 池善雄 軍鷲



大阪 北川脇賜春

彩墨道人 多都

東城先生清鑑

が洋法と云ハ墨流しの法い日本婚姻とのゑハ云ひ

[illegible]

○晩酌後早く寝ることの習慣をつくるみる事い
睡眠をとる二時頃夢の醒めるのが例で時〻枕頭のか
説話と雨とも淡ちことあるが、ハ説とこあるも児めの
淡々たることと所々の講談俗話等都度ハこのある。
枕頭刺激を受けたハ程のことあるから、夢中
の淡々物語を覚ることがよい、昨夜も同じ
枕頭の実人と天明ちて淡々駄ハ外大概ハ朝起
きて頭ハ何ぞの印象かを残てゐるが、陰つて
特と云ひ主とるものの筋ハ多くハ侠客の話な
とや昔しの形の講釈の焼き直しるきぬ俗
所枕淡ちどこまで内と一寸変つた所のこのこの三
つ計あつた、

一 鄭成功に後々のある陳元賢が日本に来朝を
待ちたとふ。侍伝から無刀で優れた武士を
手玉に取つた事の異の働きを為す、それを中心
として種々の脚色をやつたものがある、これを一
つの思ひつきである

一 或る豪金家の四男が癖がある、それは自分の仕為
を四代続主に先つて為る為に、
す何等の方法によつて人知れず取り返す、例へ
ばこうした其人を殺害し荒くい盗みもする
又は再就の者を使つて来たると云ふ所、西
洋のある小説に似たる点も多い

一 戦国時代の我侠を財産を山林に隠せるも

十二行

武人が美色の美貌の為を失ひ、あまり荒年
で飢餓の時に穏やかに暮しきれず、
時に穏やかに行動に出で、煩悶に堪へず
剃子天皇の詞を刻かんと心する出征
を企て剃子を使はんとする所、これも人情
の解れに新しい味がある（洋後伝来の春物語）

○田中義一大将が軍役の現職を解き又百合の花
計りをんとしつてあることは前に記したが、
（その云く、田中と巨万の金があるかどうかはともか
く、彼の云ふ其辛苦する百十万人の其中人が
ある、設令金が無くとも、北の事実を大なるお土産

であると、政友会幹部は大恐慌であると
○此頃国考俱大会の話後多会に出席の為め久方振
星ケ岡の茶寮に出掛け時刻の早く家を出
なから山王の周囲を廻り、社殿の正面まで出て茶
寮に入つた、大震災後此方(此)に来たのは、これが初めて
で、山王境内は樹木繁り、大火災に罹つて無残の姿を留め、多くは枯死して
惨憺たる有様であるのに、慨然として、茶寮を
出ると目の覚めるやうな、自然色とでもいふべき
大きな樹木は多く火災に枯れて、日光を漏さぬ
しげりの密葉に、今はがうりとして見る影もなく
なつた、北の茶寮は武蔵野の特色をなす、人造池

の様子が知られるが、刻意の形式は前とは全然異つ
てゐる、彫刻意匠は書に高雅に、形式は支那料理
の倣つて全然日本の材料を用ひ、会席を多くべく前
菜を実種に出し、酒は皿や鉢の目盛りを運ぶ
形式は支那風を倣つてゐるが、酒肴の式は日本風で刺
身の中汁は七流位に工風がある酒肴のなかも
てある、魚の焼物は表に大皿に入れて客の取る仕
かたをまは支那料理の形式で桃山酒
くるの式に工風を加へ支那式と異つた点がある、
なお三十名かを落る就ては、
ところ流石に、自分が例のこと流論の音頃
流くかことく流笑が起つて、時代帝大の同志破

が自分の前に出しとれば、こんを流しの手を危険
なもの論議をとる入り高、高おの奥を感じて、姉崎公酒
次第に和歌を楽しむ
花を待つうつきの宴に
世八花の花さく頃を待つ
雪の内に道や迷へる
○古体格雪堂先生の長歌で倣宋流字で老子輪注
を出版したとの事一部を贈り来る、此の書八昔西
田是の著で、邦儒の手を経て老子の注とした
八、出色のものとされてゐるこゝである、巻尾に人宮
浮達の歌と此書の優位の一斑を説いてゐる

十二行

先生之解、多出入高表、忽後之、花の驚、而其實
逐眄投線、光到義理爽而止、久之、人々厭服服
如王弼疑庄兵、立軍之説正文、傳奕疑常善救
人常善救物之獨得諸河上公、晁説之並奉之
逐成数百年疑案、而今釋然於先生一揮
如載載営魄載字、屬之上章、改庄兵庄字
作唯字、改天下谿字谿谿字作雞字、法古漢魏
以来誤訛、如出生入死章、韓非子解老已屬憤
憤、戰國以来、莫精彼其謎者、先生之於老子、
豈啻千百年一度明眼云哉、有老子以来無此
明眼也云々

四月十一日記

○左の如き簡の意しハ明治三年二月三條實美が時の
參議伊藤木戸行と共に奏上なりしものなるべし維新史料
陣列に出なるべきの事、大隈侯を參議に登用する
の意見の大要ハ北海道の事、西時三條が大隈侯の狀
略を奏し取り同説の伊藤木戸賛成を求め給ふ事
歟と、侯が当時徴士権議術数を乗するを見
られ給ふ事歟と推ハべし、大勢ハ侯を参議と
するを傾きこゝに副島こゝの異議なし地
子等、未だ其何れかを詳にする能ハず、
兎に角北の一説を先策の備忘の資料に供
し得べきこゝのみハ、敬伺を乞ひこゝの収めお
くとなり

前略、昨日は同勅、引続き陳情有之候民部大輔と義誠に
今日の急務は至要と存じ有之昨夜来相考へ候
処小生見込に別紙の如き大隈氏を参議に登用民部大輔
を義も翻然奮起と仰付候ハゞ政府と民部と情実も
通有力な人材兩重に有之候ハゞ自ら政府の權力も
強くなるべし偏重に憂なき之儀と存じ候
成丈は式義小生と共に倫理を追ひ西人に強
従合致する如き如何成ハ
鎮むること能ハ稍々繁雑を除き物議
天東大隈伊藤兩士に義ハ頗る有利有識又有力難得
と奏聞大に頼みなく人に有之候ハゞ如何歟才英敏に余
人を籠絡し権謀術数に近く温和に氣象包容

之度量衡を起こし身位**挑**を来し今日の物議を生ず
者しおるのみに付現面他に可疑の**無**可憂の少なき
実に不安の人也然るに大隈と参議に用ゆる副島
と相く異論に似たる氣味すり小生**若疑**らくは小生か
大隈を参議に奉ずるの副島に疑念
有**て**之小生官を免じ参議に辞令を渡し**也**
却て小生未論破ろんるの如きと思惟致居也
足下いかゞ小生の大隈を奉ずるに決して餘意なし
時ゞ衆論を徒と材力を政府に奉氏大き权力を
政府に収攬されるの思い天下を思憂の**独**
憂不堪して善悪共に政府を担当なるを以て
我輩副島廣三氏と同意なれば大久保に在て異
論を不の有**歟**小生愚按氏策を捨て他に良策なし不
国**れ足**下に論小生に見に終今後仍而郷か鄙見
足下に告猶考慮を上今後に至**周旋**有之
政つゝ幸甚ゝ猶後**刻**面の上万一隙保共参
朝**之**上**人**(**避**)副廣に改談頓魏然に有之採然
と以書柬大概愚論申入**置**為や**不**盡

明治三年二月廿三日

侍史木参議殿

至密

海内美

○全国国宝保存会を催し、とうきし東洋文庫に交渉してその陳列を陳列して貰つた、其の出陳数は六十点の多数であつたが、流石に何れも稀覯の国宝だけあつて、中にはおもしろく感じたものがあつた、ファリミレー二葉を掛くれば目録を配布さんれから、其れを保存することもそこまい家内の五点を掲げるに止める

本邦古鈔本の内 日本書紀巻第二三（推古天皇紀）は寛平延喜頃の写寸と覚へるこの方で房前伯の四巻本と共に有名なものである。

古鈔本論語 十帖 第二巻の奥に貞和三年八月二十七日 舎人友今講釈畢 左中将宗重

とあり、各巻末に 左永九年八月二十二日 感得之 並英とある。臨川寺の朱印が捺してある、北寺は堺の古刹で、そこの蔵書であつたことを考へると、正平版論語を堺で出した時に北寺を巻校したらしく思はれる。「論語」の論ルリンの論名が振てあるのは注意を要する。昔しはリンギョと読んだといふ説もある。論は聚従の意味と言ふ説もあるが孔子の語を類従したものと解して

ある

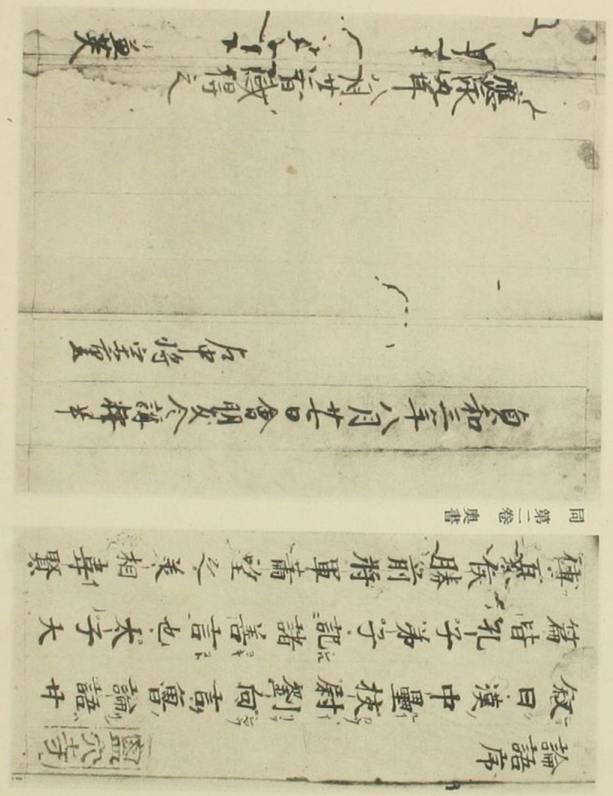
本草の古本も三種出てゐて、小型共に自画蒙島図（伊勢幸人の影写あり）も

あるにせよ、増山雪斎の「草花雪生図」がおもしろく思はれたり、雪生といふ以外に流れた風韻がある

支那刊本の方、宋元槧も数種出てゐるにせよ、宋紹定三年刊『楽善録』十巻五冊（東福寺開山聖一国師（円爾）が支那から将来したものの巻首に円爾花押の識語ある外）中に円爾の署名を数見す

元槧宣和博古図（三十冊）は円爾の号「花」と共に「松雪斎」の印うあり、元の文宗帝の雷印、「天厨之寶」の印もある

北外宋槧 唐賢文粋十冊 これも金本にあり



同第二巻奥書

貞和三年八月廿七日 令明覚禅房

貞和本論語何晏集解第一巻首序

論語序

魏 何晏

侯 孔子弟子記諸善言也 太子太傅 中書令 尚書僕射 侍中 光祿大夫 関内侯 臣何晏等集解

アマチ攝伊逢政宗歐洲遣使記獨譯本挿繪（支倉六右衛門肖像）

西洋人の支那、朝鮮、日本の内に珍らしい書
英船ライヲン号の航海日誌である。これは一七
九二年九月二十九日から一七九四年十月廿四日
の記事を載せ、英王最初の遣支大使マカ
ートニー卿の乘船ライヲン號の日誌の
原本である。北斗卿と陸奥しは英王西
家アレキサンダーの自筆で支那風俗を寫
したる彩畫帳の原本美を一七九二年ロンド
ンで刊行したものである。
本邦と羅馬、支那、兼ねゼシュエットに関する圖
書は北文庫の特徴としていろいろ珍らしい
ものが、一番面白味をそこつれこの

あとで北方面の刊行の年の刊行であつたと思はれる。

細川がラシヤ侍であつた、北方の細川忠興、天人がラシヤを主人公とし比叡山説ひ、天人が往来せし神を拜したつる国とい明る無味を覚へ北、北国のモンタヌーヌの紀行中の国とい敬を異つて、よく日本天人の来をうつしたもの。北アアリシヤレーが北海道使記、大友有馬大村三侯欧洲遣使記、蒲生秀千代以下欧洲觀の出ひ等、元を伊東茂千代以下欧洲派遣の如き記を記したもの、ギドウ、グアルチエリ撰一五八六年ウエネチアの出版ひ。

北外に左の数出い陪集い特に注目を為いた

十二行

四四　伊達政宗派遣訪欧使節關係記事

ルイス・ソテロ撰　セヴイリア、一六一六年刊　一冊

ソテロは支倉六右衛門の一行を伴ひて渡欧せるフランシスコ派の僧なり。

四五　同　上

撰者不明　セヴイリア、一六一四年刊　一冊

四六　伊達政宗欧洲遣使記

シピオーネ・アマチ撰　インゴールシタット、一六一七年刊　一冊

伊達政宗の改宗及び支倉六右衛門欧洲派遣に關する顛末を叙せる書なり。

此本はイタリア文の原書より獨譯せるものに係る。

四七　日本在住耶蘇會士書簡集

コインブラ、一五七〇年刊　一冊

一五四九年より一五六六年に至る間に、日本在留の耶蘇會士より印度、欧洲等へ發したる書簡を集めたるものにして、フランシスコ・シヤヴエリヨ以下多くの宣教師の手簡八十八通を收む。その中バルタザル・ガゴ及ヴイレラの書簡などに邦文の文書若くは邦字・漢字の標本を示せるものあり。西洋の書にて本邦通用の文字を傳へたる最初の刊本とす。（從來始めて漢字を刊出せる西書としてメンドサの「支那史」、セメドの「支那誌」イタリー譯本等を擧ぐるを常とするも、或る意味に於いては本書を以て漢字を印刷せる西書の嚆矢と認むべし）。

本書流布極めて稀にして且つ諸本の間に多少大きさ及び書簡數の異同あるが如し。

考殆義者列傳も数ヒあるとて、モンタヌースの原本
ハ猶佛英三種の譯本が出版されてゐて、外に古版
ハイブル三五、漢拉字典三種所載のものに
注目を惹いた、古版日本地誌の類も数
點あるが一々紹介する遑かなき（四月十三日記
以上の外に古版暦が二種陳列してあり一ハ元
弘二年の断簡で他の一ハ永正十一年の断簡で
永正の方ハ細字で刊本である、永正のすち
極古の長綴が附してあると、それによると多分
医家の義也とのこと、其料とされるもの
ちがれてゐる、若し迷信の魔力あるとせば
古暦を割て喘ひむまば癲疾を治すべし

十二行

とつゐにこうゝ、或ハそんなことをいふとおもひあり
う

○紀州に有名な外科醫花岡随賢ハ幕末の頃の
人で、医術を施すに従て機智を発し治療の効と
奏したといふ一例の如きハ嘗て傳する、或る患
者に睾丸が三個あるとて随賢ハ三個共に自己の者
かをいふを疑つたが、之れを験するに因んで、味噌桶
すると千あり、患者を横臥せしめ、白刃を提げて股
股をつゐらき、患者を威嚇し、こんなに睾丸を切
ると宣いて、遂に畏縮して睾丸縮退す、随賢
丸を仮細に捻すること二丸没して一丸存す、
即ち其の一丸を掘り、こんなもと、其の自己のよう

ちくさを知り、之れを流すと、此醫男く麻痺剤
を用ひ、而して洋法に倣ひ、其他
の用ひる黄法なりと云ふ所なりと、
○柿瀬日年と話次、例の元祿模様なる浜流か
ら染出すものなりと、余先琳の逸話を語る、先
琳或る男人の為に衣服に模様を作る、一見すれ
ハ市帛に墨を一面に塗りたるのみ、男人之れを
喜ぶ、怒りて之れを棄つ、後日先琳はしらべんは
墨中に浜草花、紋様あり、時草花なり、此の
其極妙なること、日年に就て語る墨絵
の中に墨絵の何等かを現はす染法に於て面
倒なること也、此れ夢にて一法を案して成ひすと

十二行

の法先づ撫椰子墨を以て地に模様を畫し
瀧墨にて染めんハ、紋様あらはれと見へて京都の
執あり、と、瀧墨とは染料 未だ詳細を知らず、撫椰子墨を地に畫とすると云ふ
と其製を問ふに、此れ夢にある冊数（四月
十四日記）
○友人新村出博士に其名の義を問ふ、彼れ
ハ言語学者なり、曰く父の命じたる名
なれハ出處を知らず、男子なる毋山田形を見て山
口氏に於て産す、之れ山の二字を所以とする
例の考証的説明に喫驚す、染ハ関口隆吉
の説なれと新村ハ美濃家の姓なり、蓋し妄

『隨筆頼山陽』

（市島春城氏新著）

一記者

『隨筆頼山陽』は本誌の讀者とはお馴染の最も深い市島春城氏の新著である。

趣味の該博なる點に於て鳴れる市島氏は、山陽通としても亦、夙に有名であつた。本書の序文によれば、氏は青年時代に最も山陽に傾倒し、其詩文章を愛讀した許りで無く、苟くも彼の爲人を想像するの料たる限りは、些末の逸事すらも見聞に從て筆錄した。其れが宿癖となつて、後年山陽の弱點や暗黑面が追々分り、傾倒の念が全く薄くなつてしまつてからも、彼の事としいへば思ひ捨てかねて、其評論をも逸話をも喜んで聞き、其の墨跡をも好んで觀、或は其の遺跡迄も訪ふて、其都度必ず之を錄し置くを例とし、書畫の題識の如きも、興味あるものは決して之を逸せなかつた。『隨筆頼山陽』は此の多年の筆錄を底本とし之を取捨整理して刊行されたもので、從て書中に盛られた材料が、山陽に關する幾多既刊の書に未見の事實の甚だ多いのも、尤もの事と肯かれる。且つそれが隨筆の體を取つて、極めて自由に書中の主人公を論じ、且つ語つて居るのは、普通の傳記物の體裁を破つたもので、山陽の如き多面的の人物を傳するに最もふさはしい。

文化、文政時代に輩出した文人騷客のうち、山陽ほど多くの影響を其時代並に後の時代に及ぼしたものは無い。若しルソーやヴォルテアーの著書が佛蘭西革命を起す大きな力となつたものとすれば、之と全く同じ意味に於て、山陽の日本外史は維新の革命を起す最大の原動力となつたと云ふてよい。外史を初め山陽の幾多の著書が各階級に崇拜せられ、其の書畫、書翰が多くの人士に尊重せられ、其の斷簡零墨といへども常に格外に

高き市價を保ちつゝあるも、敢えて異しむには足らぬ。

但だ、斯くの如き山陽崇拜熱は、勢ひ山陽を一個の偶像化せしめたる迹なしとせぬ。特に在來山陽を傳せる多くの著者は、一種偶像崇拜の心事よりして、故らに山陽を偉大にせんが爲め、苟も山陽の事としいへば悉く之を稱揚し、其の弱點、暗黑面すらも强ゐて之を美化せんとしたる傾が無いでも無い。斯の如きは、批評的精神に富める現代人の到底共鳴する能はざる所で、其の結果は却つて一部の人々の間に於ける、山陽に對する反感を助長するに至つたことを否み得ぬ。

『隨筆賴山陽』を讀んで最も我等の意を得たるは、敢えて主人公たる山陽の瑕疵を蔽ふこと無く、有るが儘の山陽の描出されてあることである。玆には固より山陽の長所も擧げられてあるが、其の短所、闕點も亦少からず擧げられてある。たゞ其の長所を擧ぐるも、共に故らに之を所を指摘するも、稱揚し、或は譏貶するを目的としたもので無い。それは『偶像』では無い一個の『人間』たる山陽を描かんが爲めに、何等の成心無く事實をして事實を語らしめて居るに過ぎぬ。かの徒らに我佛尊しとする幾多の山陽傳の間に、『隨筆賴山陽』の占むべき地位は、自から明らかである。

『隨筆賴山陽』は幾多の世上未見の材料に依つて作られたものである丈けに、其材料を基礎として組立てられた著者の山陽觀には、自から獨自一箇の見解を窺ふべきものがある。たとへば山陽の苦勞人であつたことを叙して、山陽が大家となつたのは其の天禀に依るは勿論だが、少時より色々の苦勞を重ねて、世味の辛酸を嘗め盡した修業の然らしめたものである、山陽を目して傲岸な見識家となすは、單に其の一邊を知るものに過ぎぬ、山陽ほど世の中を心得た學者は多く無い、彼は非常な通人である、彼は常に地歩を占めながら巧みに世を渡つた、彼が幽居時代の著述日本外史を終に世に出し、不朽のものとしたのも、其縱横の懸引の妙を得た結果に外ならぬ、あの、官學の重んぜられ、階級のやかましかつた世の中で、一布衣の著述が、時の政府の採用を得たなどは、珍らしい例と云はねばならぬが、畢竟彼が世故に慣れた手腕の働きである、その著述があらゆる階級に喜ばれ、今日猶その生命のあるのも、その作品に人間味が漲つてゐるからであらうといへるが如き、最もよく山陽の人物を活寫せるものと謂はねばならぬ。

山陽の代表的名著たる日本外史が、史實としての價値に乏しきことは、夙に識者の間に唱へられて居ることであるが、『隨筆賴山陽』の中にも其内容に付詳しく論ぜられて居る。外史の引用書の如き其の首部に少からず並列されてあるけれども、實はホンの飾り物で、其の大部分は山陽の眼にも觸れなかつたものらしく、彼自身の參考した圖書は僅に本朝通鑑、大日本史、外數十部に過ぎないらしい。大體は本朝通鑑の燒直しで、『外史氏曰』の論贊すらも、新井白石の『讀史餘論』を換骨脫胎したものと評せられる。記實の正確の如き、固より初から問題にしなかつたらしく、外史の草稿を見ると縱横に朱書があつて、机の上で勝手に兵數を增減したり、或は畫の戰を夜襲などにして、隨意に變更を加へた痕が歷然として見られる。而もそれは何等史實に基いたもので無くて、單に夜襲にした方が面白いとか、之れ位の軍勢でなければ興が乘らぬといふ具合に、彼自ら工夫したものである。要するに、考證詮索を第一義とする現代の史學よりいへば、日本外史の如きは缺點錯誤に充ちたものであるが、山陽は斯かる方面は多く意に介せず、自家の歷史趣味を廣く民衆に傳へ、之に依り勤王の精神を盛んならしめんが爲め、縱横の筆を行つたもので、其の立脚地が全然異つて居るのであるから、是等の缺點を以て日本外史の價値を云々するは甚だ當らぬ。是れ著者が史家としての山陽を論ぜる大意である。

賴山陽の書簡を叙して彼を以て古今獨歩の書簡の名人となせる條には、著者自身が古人の書簡蒐集に非常の苦勞をした人だけに、特に傾聽すべき節が多い。著者のいふには、手紙を書いて眞に其人、其時、其事で無ければ通用せぬ、動きのない、生きたる手紙といふ條件に及第し得るものはといふと、實に山陽の外には無い。此人の書簡は、何十通目を通しても、其の書出しから中頃、それから終

りに至る迄多種多様で、時候を叙しても、それから一ヶ月後れてはもう間に合はぬやうな適切な文句を用ゐる。起居を問ふにも『御機嫌よく被爲在候哉』ではなくて、何事か其人のみに嵌まるやうな事を書く。用事に至つては勿論の事で、其他之に隨帶した背景も亦然りである。同じ朋友でも小竹に對する文と、竹田に對する文とは自から違つてゐて、全く其人を外れぬ所に不思議なほど妙を得て居る。彼の書簡には非常に碎けたところがある。相手に反感があつて立腹して居る場合でも、之を受けたものは心自から和らがざるを得ず、ツイ破顔一笑する、といふ趣がある。是は彼が人情につけ込む老獪な手段ではあるが、併し平生高く標置して居る彼の事故、かうした場合に必ず何處かに地歩を占める文句を挿んで、よく釣合をとる。例へば灘に送つて酒の無心を云ふ手紙に、酒が無くなつて閉口して居ることを云ひ、轍鮒御救ひ被下度と云ひ、書いて上げた詩、若し御意に適はずば書き直すと迄いふて、最後に平生こんな事を云はぬ男、酒故にこそ、と地歩を占めて居る。尚ほ市河米庵をして『雋絶無他』といひ、『才思如湧、感歎に堪へず』と評せしめた、同人に贈つた山陽の一簡を、茲に書中より轉載しやう。

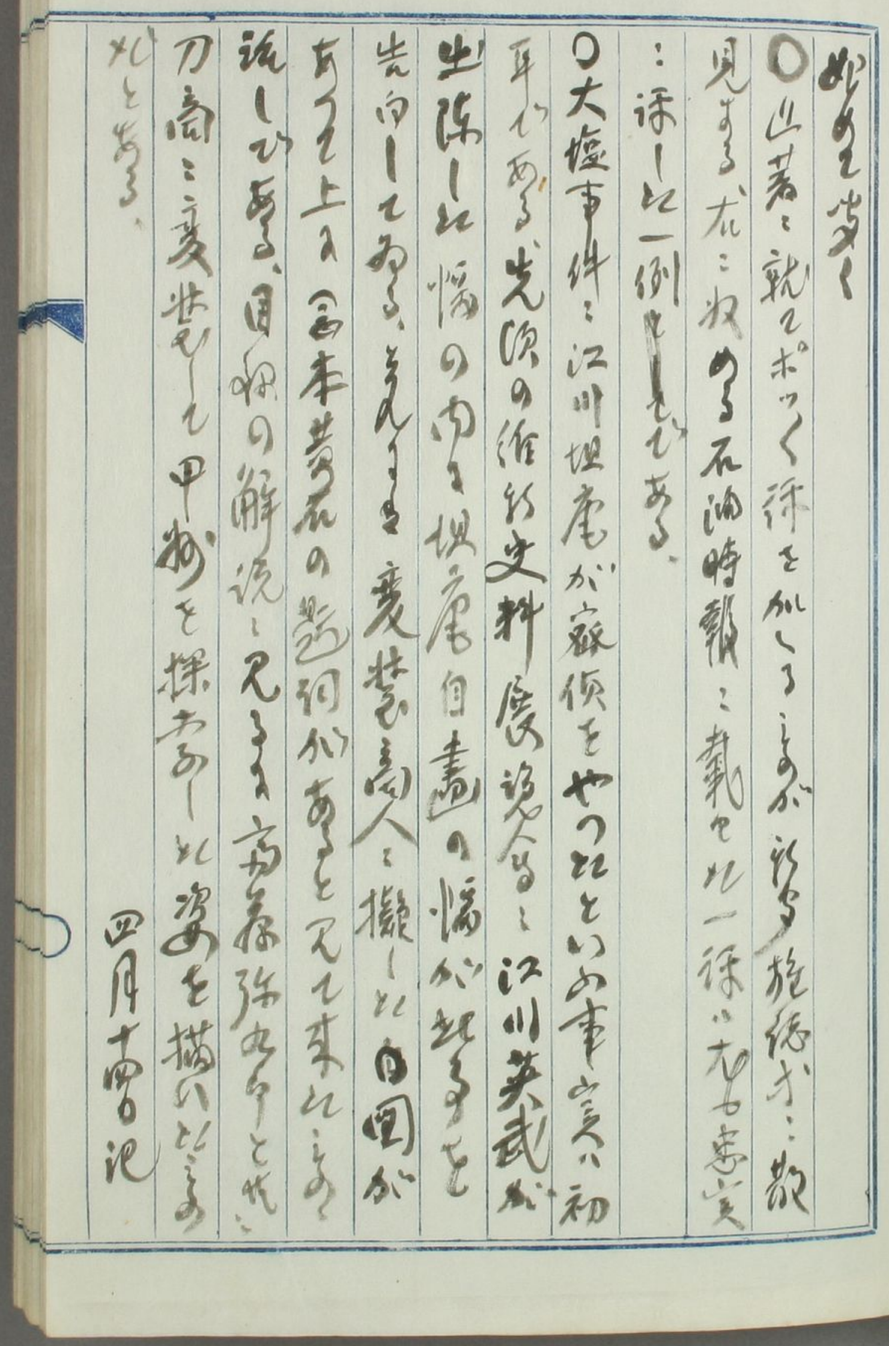
裏などは五尺の軀を蔽候具さへ不足勝に御座候、畳帖ば宿好なれども垂涎三尺のみに御座候、御儻蔡可被下候、ちと金儒の術あらば御傳可被下候、京人氣習他所へ參り候ものはよそ犬に吠候氣味にて、裏など兎角合手に致不申困申候、此節智勇皆窮候、ちと關東勢の勢援を待候、遙爲策應、不致敗師敗績候樣祈願候、此段五山兄などへも御傳可被下候、非戯言也、所欲言非一、臨楮悵然、不備

孔陽賢兄　　賴　德太郎

二月二十七日、長楽寺の花未開、雨勝也、あづま如何

其他山陽の詩、山陽の篆刻、山陽の書畫、山陽の畫論、茶の山陽、酒の山陽、家庭の山陽、山陽と諸友等を叙せるもの、とりどりに皆面白く、一讀卷を措くに忍びざる思がする。さうして讀み終ると、複雜な、多面的な性格の持主たる山陽といふ一漢子が、髣髴として眼前に現はれ來ることを感ずる。山陽を好む者にも、好まざる者にも、近來の佳書として『隨筆賴山陽』を推薦するに躊躇せぬ。

市島春城氏著（三六版六百五十頁）
隨筆賴山陽
定價金貳圓八拾錢、郵稅十二錢
發行所　東京牛込　早稻田大學出版部
（振替東京一一二三番）



○長井雲坪は、徽侯沢蕃出身、儒家の子で、芸術の院
に入りて、不遇を終始した。自分は、四季の眺め
を、人時代毎に、たくさんに作る。三四幅を愛玩し、且つ其の序跋を書き
、或は人に乞はれて、少々ばかり、百字ばかり前の徽侯高田藩士、北斗の
つけて、載せたことを、いろいろ、自分の笑き及ぶ
いことをいろいろ、あるのみ。其の切抜は、地冊の前書
に貼りつけて置いたが、其後、補べて見ると、高田藩
士、記載のことは、中央公論の雪坪傳の
部をとるに、中央公論の新年号を
焼き捨てて、高田藩士、逸話を、

十二行

く、昨夜は寝所に、二時頃から、ヤット
寝ました。北傳を、村松梢風氏、傳の本文
八四十頁もあり、北傳を、海に、材料を
集めた記、三十頁もあり、大体は、
の中、書いてあるから、附録にする。
事実は、誤ってゐるものの、間違もある。
過の芸術家、日蔵を、守りてゐる所、自分も、
すりきつけられた、北雲、
譯は、其書、の氣質本位であった為めである。自分和尚
の悩まで、決して、十人受のする、ものは、一悟一尺
は、細い、條悟は、戸隠山、あった、仏が、多数の、
が、描いてゐる、盤は、形似に、拘らず、

こゝあるが切なる一種の風趣を見へて雪ほが紫
中庵を得て旅舎のひ燈火に蕭々たる其像から
後に芭蕉を書うとして其書が破如びよく離れ
似てゐると山谷のこゝが清しいと情風
のまいに伝ずるあるべし（北色）伝ハ特に興味を
感じて

（四月十四日録）

○越後なる庵後の高遠なる書文の玉数を寄せ
来る、近て蜂田後家の数策小説文化をあ
つて庵中吟を書きつけ示さる

前略　断快につゝて酒分を与へ、
ひしが歌をよんだる気あるも百のず気ま
くんるも生れたれ共めその俗句さまをい

ひし例の秋茶を、朱を見ひにさし出し京
廿酒のうち四番を飲みうるをみて
朱をかへそう詠をしてくんこ中を
お笑ふものと考へ
ひざともとのまを神境とへん、

庵来心機不四倫と一輪も死を忘
み情るこの会れ空しく寂寞速
うん世を辞ることこれ移ろう
悔らうぞ花も見あいて日に暮れこ
こいらがよい　さて花の旅
奥うえ花の時過しけう

四十ゝを死なむとす　易けんも、人
さしにけり未二年ともえこそ
わんハこと〻しく十七年
十七年えさしく　まを病む身う
まんやいざ散る花ともろともに
新そくば桜月の落ち枝
導原とのふ流奏くるしめら
れて
生きるゝ身しを逆剥きの蛭蚓かや
晝夜寸時も止息せる幻像の往来
まぶろしの海に漂ふや二月の

クインシーを浸みる）さかやとおもひけり
こんやこの目のあたりする苦責う耶
死機を逸す
ゆくしら春をたん　そこのうちはまひけり
ゆくを共にちめ　れそん病々馴んぬ
四月三日もしめん庭におりいう
わが物とおもへ　聊の命をみうる
どんが腸に徒ゝ　ゝとはいう三生うる
春寒や睡はもん　股ゝ細りけり
初めて見んバ此後とも　何のセ物バ
ゆるすまじ
さいりとも春へバ生きそ　みるうるは

隨筆 頼山陽

稀なる好著

◇史家にして詩人を兼ね、文士にして又通人であつた頼山陽の如き多方面の學者は古來の日本文壇に全く四傳を絶つてゐる。此の往くとして佳ならざるなき多趣味の才物を捉へ來つて其の表裏兩面に鋭い解剖のメスを振つたのが「隨筆頼山陽」の一書で、恰もそれが當代に趣味の點で知られてゐて而も山陽通の名ある春城市島謙吉氏の手に成つたに至つては、實に此人にして此著ありといはねばならぬ。

◇既刊の山陽傳は世上に多い、然し本書には從來のものに見られぬ本書獨特の持ち味がある、蓋しそれは本書の内容が新事實を以て滿たされてゐるからで、著者の目的も亦成書に適した多くの材料を收錄するに在つたと聞く。果然其努力は酬ゐられて、世に傳はらぬ幾多の異聞奇行の類が紙上に赤裸々の山陽を活現して眞に一讀卷を措くに忍びざる感興を具へてゐる。

◇六百三十頁の全卷、讀むものをして殆んど學者文人としての方面以外に人間としての日常の山陽に直面してその呼吸に接するほどの親しさを覺えしめる。彼が生活、交友、性癖、閒事、其他の全体に渉つて觀察徹底、實に剩す所もない。之も畢竟、山陽其人が一世を驚しうる奇才を有してゐたゆえでもあらうが、著者が少壯から夙に山陽に傾倒して爾來其研鑽を怠らず多年集積した資料が豐富であつた結果であるとは、ふ迄もない。著者は近年三四の著述を試みたが、本書が最も苦心の作だと語つたが、此書を手にして眞に其語の僞らざる叫びであることが首肯される。記者は文壇の偉人山陽の全面目を知らんとする人々に是非此好著を繙かれんことを勸める。（正價二圓八十錢、東京市牛込區早稲田大學出版部發行）

○舍の近著「頼山陽の研究」の紙上報告は十日間連續して内容の概要まで紹介したるが、此の研究の内容は頼山陽の一書を讀むと同樣の感を與へる。

○日比谷図書館の今般、市図書館と一人の小使が著述した「物の助業」は、北海市、熱海市、叶はず口授して筆記せしめたものと、山田の家の筆記者は余の近著「新しい西の行方」の紙上報告を

十二行

隨筆日本人

◎隨筆頼山陽

市島春城著

山陽評傳や山陽崇拜の文章は、積んで山程あるが、人間としての山陽を微妙な筆致で示したものは少ないやうだ。市島氏の此の著は、さうした缺所を突いたもの、優雅にして流暢なる文を以て、緻密犀利な眼光でふるひわけた材料を刻明にしるしつゝ、興味深く讀ませるところは、味ひの豐かな書である。山陽の生活、文藝、雜事、趣味、彼の交友諸家等七篇から成る。表裝なぞも凝つたものだ。（定價二圓八十錢、發行所東京牛込區早稲田、早稲田大學出版部）

下駄を履いて歩けるが、北男は裸足の本の心得があるを本の編ぶ
ハ仏の論、相面と剃髮本ヶやる、毎日の洒掃ハ言ふまでも
ないが、障子の切れ目を繕ふとか、襖の切り張りもする。本の
貸出しも七手傳ふとか、重寶なもの、日比谷の
多く有しを居る分銭中、日比谷図書館の北海道
ある者多き特に評判よろしく禮をうけ、亦お出下さい
コンナ小使ハおのづから図書館の樣子を少く
性格を考へておるが、出来ない故教育がうい為め

隨筆 賴山陽 稀なる好著

◇史家にして詩人を兼ね、文士にして又通人であつた頼山陽の如き多方面の學者は古來の日本文壇に全く匹儔を絶つてゐる。此の往くとして佳ならざるなき多趣味の才物を捉へ來つて其の表裏兩面に鋭い解剖のメスを振つたのが「隨筆頼山陽」の一書で、恰もそれが當代に趣味の塊で知られてゐて而も山陽通の名ある春城市島謙吉氏の手に成つたに至つては、實に此人にして此著ありといはねばならぬ。

◇既刊の山陽傳は世上に多い、然し本書には從來のものに見られぬ本書獨特の持ち味がある、蓋しそれは本書の内容が新事實を以て滿たされてゐるからで、著者の目的も亦成書に逸した多くの材料を收錄するに在つたと聞く。果然其努力は酬ゐられて、世に傳はらぬ幾多の異聞奇行の類が紙上に赤裸々の山陽を活現して眞に一讀卷を措くに忍びざる感興を具へてゐる。

◇六百三十頁の全卷、讀むものを飽かんと學者文人としての方面家庭、交友、性癖、閒事、其他の全体に渉つて觀察縱橫、實に剩す所もない。之も畢竟「山陽其人が一世を驚しうする奇才を有してゐた爲めでもあらうが、著者が少壯から夙に山陽に傾倒して爾來其研鑽を怠らず多年集積した資料が豐富であつた結果であるとはいふ迄もない。著者は近年三四の著述を試みたが、本書が最も苦心の作だと語つたが、此書を手にして眞に其語の僞らざる叫びであることが首肯される。記者は文壇の偉人山陽の全面目を知らんとする人々に是非此好著を繙かれんことを勸める。（正價二圓八十錢、東京市牛込區早稲田大學出版部發行）

▲現閣の跡をねらふべく田中大將を舁がうといふ運動は現内閣が成立の翌日から大將をとりまく鷄鳴狗盜の策士によつて試みられてゐた。或は大將と大木とを寶塚に會合させたりもした。併し夫等總ての運動は皆な悉く大將を長閣の後繼者として今一度中間内閣を作らせようとするものであつた。政本乃至政友を踏臺に所謂肝膽相照の與黨とし、それを繰縱す

○舍の近著に新しい西の行方ひい書の北紙行報を十日間連續して内容の校草まで出して行くをしてゐる人形の行方の尚すしも安を得ておらうと及ばるい、北の記事は余か著述と自の助業をれ山田翁既か廣中熱中叶はず口授して筆記をしめたるあとと山田の家に走から報して来れ、

四月十三日錄

○余の今後、右田田舍彼こんな好ると珍物で物と

十二行

○彼の北海道の出張を送く北海道人をお客扱をして試みられて居た。其の帰る時をハ下駄を穿いて居て兼ねて鄭寧に礼を述べて帰る。北男ハ紳士の心得がある本の編ハ勿論、紳士と紳士やる、毎日の海帰ハ立ち寄もの切れ記憶ちどいかり居りもする。本の貸出しを七手傳ふといふ重寶さるが、日比谷ひ多く有して居る今後中一ヒ百田田舍彼ハ北海道のある者を特に注判ようといと云いたるとを文(れ)コンナハ使ハおのつから田舍彼者の樣をとなるべき性格をもつておるが、悪しい教育がるい為め

いどこまでも小使である、えうれ申と教育があつた方
が国体の立派な彼方の立派なる、地方の公園
飯塚の北や使こゝゝゝ見る習ふ所があるよ
からう

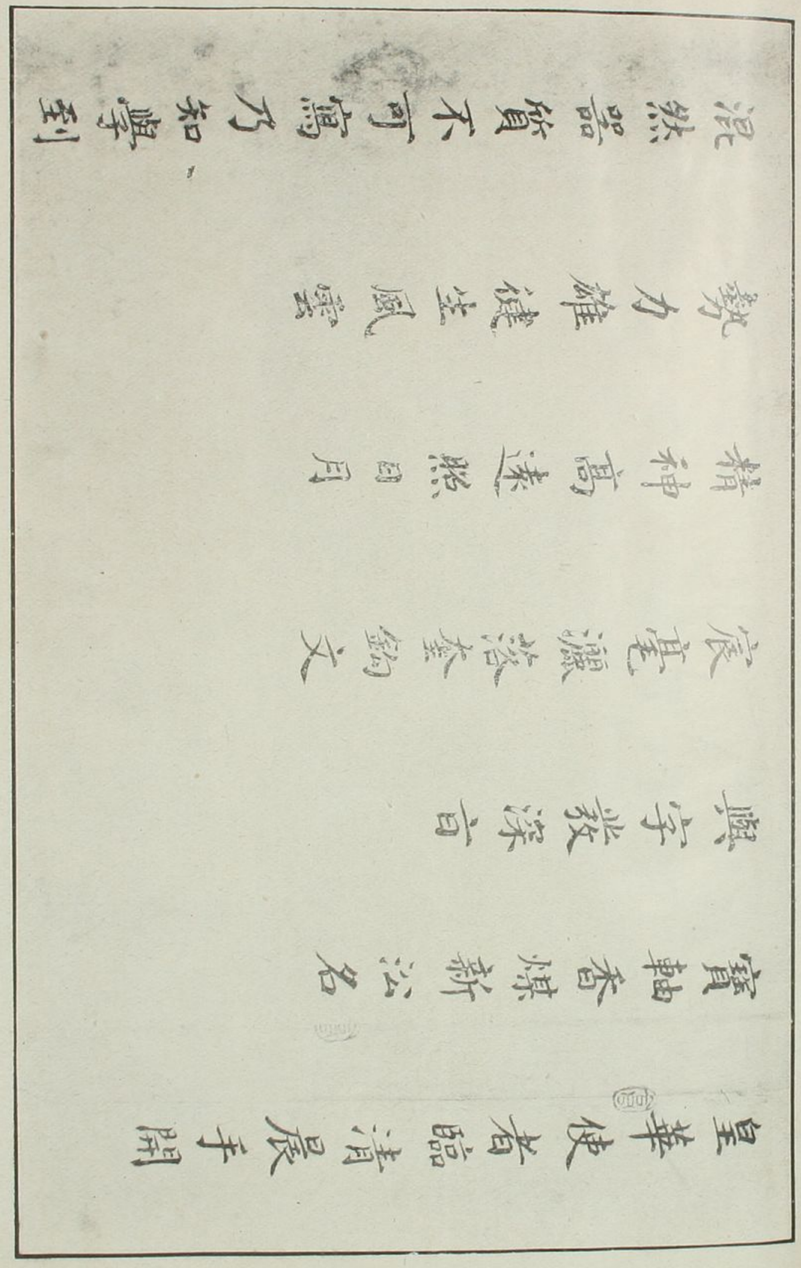
蔡襄の書（宋人）

蔡襄が宋代の大家で、人格識見卓抜であつたことは人皆な知る所である。然るに其時代に於てさへ其書は容易に得られぬものであつた、況んや後世に於てをやだ。幸に支那の端方氏が舊藏品を數年前に手に入れることを得た。以前は清朝乾隆皇帝の舊御藏品で、三稀法帖にも載せられた所のものである。彼の墨緑彙觀に

澄心堂紙本潔白若玉暈色如漆大小三十七行宋人墨跡中之錚々者四接毎接縫用小合同印云々

と記してあるのも此書である。其謹嚴雄健な處は敬服に値する。兎に角日本に此肉筆の來たのは喜ぶ可きである、尚ほ之れには諸家の跋文があり、その中には米芾、鮮于樞、吳寬、董其昌など宋、元及明代の名家の書さへある。跋文は次號に讓り、今は蔡襄の書のみを掲げる。文は時の皇帝に酬へたものである。

（中村不折記）



臣襄伏蒙

陛下特遣中使賜臣

御書一軸其文曰

○四月十五日　長宗我部元親を土佐国に攻撃し、
親吳余の降書を報告を為す曰く、各方情況
千部ウ、、、ものつけ、ものの既に責切の、繕を更
ものの破すべき機を逸、
ものの前兆を、急速再攻に取りかゝるべ
バ、常用と為しマゴツキを生ずること必ずや伊
て再攻に着手し、ものゝ、余、之れを攻へて来
外の思を、ものゝ、実の所、ものゝ行き没
らるるの光を、ものゝ全く、略奪の、この頃
の例として、ものゝ義務として、北家に、ものゝ
人の名を、紹介批評を、ものゝ、ものゝ
ものゝ、直接の宣伝法の如斯し、北蕃書に就て

学家紀伝を流布するに、いまだ実行するもの少なく、
く才一版者人とす、この状況は再版も多分成功
の結果を見る歟、初版は二千冊刷りしなり也
○西村真次氏の近著「日本古代船舶研究」市四冊
日本古代の筏と葦船」上版なりとて一部を贈らる、
北葦船は古多記に散見す、西村の研究に拠れば、
葦船は朝鮮支那台湾トンキン、スマトラ
バルマ、ペルシヤ、アシリヤ、及オーストラリ
ヤ、タマニヤ、ペルー等に昔時用ひらる、而して
日本の葦船は南支那、印度支那等に係
はりありとて種々の考証を挙ぐ、アシリヤ其
他に昔時葦船を用ひたることは今存在する

十二行

古書に多く参考図を
挙げたり、竹の筏は今日本にも普通見慣れる
ものなり、葦と船を比べることも考慮に新か
らざる也、西村は船舶研究の四冊を一括して
帝大教授今井博士論文に充つるよし
四月十六日記
○北陸の早稲田文学に所載初年の軟文学の経歴
を採録してあり、多種多様の経歴
ひまり、何う話せども書く舎い西方面のものをから
ずと辞しなるも、何ずれも思ひ出るまゝ書くよしと強
て頼まる任かせ、左の雑多の話を書く
一余が帝大に入りたのは明治十年頃にして小説を書く

ことは 戯作者とても軽んぜらるる傾向あり

一 当時優れる坂無文は戯作者として多方面に往きのものを出版し、なかなか其品位低級なりし、随て戯作を為すものを軽んじ、殊に播州高砂産の文学士として例の出生氣質を出し、なるこの新しき時の新鋭の文学士なるあるまじきこと此所に雅しく

一 北海の戯作を為すものの無文の門に入らざるを得ざりし、無文という文というの名を受けさせんが北の林に立ちかとかりし

一 今の春食の世時の左文の如きも無文の門

十二行

下さる、その門下ひ有りて或手紙の書を
もらうを被門さるれひ困つて記い猶
書を差入れんることあり其の原出い今自
分不能まるる其人に對しかうい公こしかたし

一 北時分都ての天新聞人とのふこの紙面に小
説を収むるを嫌しきこと、して掲げさう
しい説を掲げるを小説と称す

一 東京の新聞の編輯者撰に小説を載せた
しとの説おこりし時主筆の福地い之れに
反對し新聞いさる媒樂本位のものあら
ずと云へりと聞く

一 去う東京日と日匠と反論や説を載せ

婦人子、閑雅彦が稿材に花士の名を必ず其の
反譯小説を出しなるを記臨す、福地も後ろ
脚本家小説家となる

一 小新聞文も小説を掲げるもの、内を無文の立
字しなるものあり、又前田愚痴の筆を把
りなるもあり、後へ、ここ略すと雖しなる

一 此小新聞は今の社説の三頁目のもの
なるし福地の愛妓芳原のおひしが書
文の所多、御酒毀もて、福地が西洋文
を書きなるもの二十行まるなる本文なるが
余の不能中なるあり

一 當時拙作体は紙本なる有表世の時杯を

十二行

寄せなる程の小説出なり、なるもなるき脚を
引きなるもなるも程彦海なるが多かりし
一 西洋小説の原者で翻譯なるは帝大の学生
生なるが始めなるしなるが、先輩なるも
金子堅太郎の外なるなる小説なる文譯
なるものなるし
一 高田早苗和田垣謙三丹乙馬(此人は後傳
なる良なるのしなるなる)芳賀矢一(西徳次
郎なるいの生)中は早く原書なる小説をも
飯味を感し、坪内逍遥も逍遥と文仲間に
入なるり

一　南時所行の五山流はスコットやリットンなどなり

一　博多道場に於て馬琴脚の作法をもきかず、繰返さるゝ七五調を馬琴の者らさるものなりし

一　道場は文つかう馬琴もときの作法が書けれど文は却つて西洋小説と新しむことを最初を粗なりし模なり

一　文淳作法も道に出るが文淳作法と云へば漢文くづしの模なるコワバツタこのなりし

直人の書の道（蘭亭）雪中梅（未完成）のごときなり

十二行

一　北時分は漢文系の文章未だ勢を有しかるに柳北の柳橋新話や服部誠士の東京繁昌記のごときは漢文の勢が大いに勢力さえ隆を服部誠一は東京新誌といふ雑誌を出し漢文を以て綴り雑誌を著し一時大いに流布し多く其弟を分せり

一　文化部作が著し出た四美談も文北堂堂いうものあつたが後は文淳作法に没頭して名を惜しむ森田思軒は北征四美談に漢文の細評を下し、それを為めるに文名を惜しむる位なれば漢の文の勢

の高かりしことと見るべし

一 軟かな戯作者の文の初めまでこれあるのつたのみならず、福地四郎の太平記源の文を書きかゝるこゝろ、志かし追ゝ軟文の真價が現はれいつの頃もあつたか或る有力の新聞紙と徳川期の四大奇書を数へ、曰く馬琴の八犬傳曰く稗彦の四季源氏曰く春水の梅暦曰く一九の膝栗毛とこゝろ、こんなもく軟文の理解さえ微候と見るべし

一 斯く軟文のが漸やく理解されつゝあり近松や三馬等は何故か閑却されこゝろ、西

鶴等のものゝ如き当時和るこの無かりしも

一 西鶴の色を尾崎紅葉に伝へ幸田露伴に伝へ一とるに淡路寒月こんなも西鶴の

ゝ傷ふこゝろ

こゝろ

一 新こゝの源の小説もこゝから美化へ一時後尾新聞に集つた連載小説は露伴の眉山小波等後者と関係し比後者ハ小説家の問題であるが中小説の文学と認めこんで後者ハ小説を載せたこゝろ

小説ものゝ如くこゝ文学新聞として仰がれがこんとの時代十六七年頃のものである

語彙の一部はコンナ工合ニツッポイ事ガ、和英の早や田
浩象二（酔多首）士）の手を関して はいろいろ考
字を附け加へた。

四月十七日記

以上のごとき語を写しうり得て帰国と出て例の国
出迎りを受けて、ナト目についた、英語の名詞が
あつた、えんは日本のお伽噺を英文に訳し
日本紙でも彩色をかく比較入ひとすべて日
本流味を二度さえ唯だ文が洋学ひあるま
で、今見ても おもしろく出来てゐるものが二冊
手に入つた、えんもこれは その時よく知つてゐた
ものだ、とうに亡くなんとゐたが、完全な形へと今
まで残る筆がしたえんと西洋人に変る

十二行

明治廿弐年を年始に時流廿七年迄を年
限刊行したものである、「鼠の嫁入」のタイトル
ページを見ると ダビッド、タムソン著、時流十八
年九月十八日版権免許日年十二月出版 京
橋区南鍋横木町二番地 弘文社（出版人）と
ある、他の一冊は「竹節太郎」で時流廿一年
十二月十日出版、著作者 古谷周武 ちらし
ひ エーム太夫人 訳 木宗三郎
とある、北の記書は どんな出版か今日わか
らぬが、続明治廿二年 二十数種 書名が列してあ
つて、佛 猫 蘭の三語を訳したと見へて、七
種の書目を挙げて注をしてゐる、えんが

も文化年間の文化を語る一資料とすべきものであらう

以上のほか「寄生」する面業（俳句紙）二冊を得た。

こんも天保十年江戸俳句伊勢屋三次郎の出版で、圓芸の戯画で花の上文京が同方をもつてゐる。百面相は此のほかにもいろ〳〵出たが、こんも圓芸の技倫をあらはしたものと云へる。行りの情合の面貌を写し、種々人をうまくつくつたものがある。「えちあのせ」「雷きらひ」「くしやみ」などの類四十図を収めてゐるが、写実の外に滑稽味のあるハ言ふまでもなく、コンナものハ稀れなものである。

十二行

○宮崎彩雲の編纂に係る蒲村抱月の徳義集一冊寄せ来る。昨夜等中より熟読七八十頁に亘る四五篇を読む。抱月と八生前親密なりしが、其他をこゝに読人にとゝまる無つたが、北陸巡業中の洋行の折の船中の日記や河内の道記を始めの記や同高紀行に歌する序ともは海石と天才を認め得る。此等は文で人を魅するのが何となく寂しい味がある。こんが北人の特徴ともいふべきか。（四月十八日記）

○朝鮮本 慕夏堂文集（三巻）合一冊 先頃手に入れ一見その伝者なることを知れり、而も何所を行る傷也

を思ひ出すことを疑い、一応これを交渉し始めたる事なり。
此の数年中、朝鮮研究会を於て出版したる同じ
様式の洋装本を得たり。これを其の傳者たることを
致証したるの者に、婚姻を申込まれ、翻譯初めて会得
する事あり、今左に其の梗概を示すと云ふ
本書（研究会本）は大正四年七月朝鮮に於
て朝鮮研究会から才十五輯として刊行したるもの
也、巻首慕夏堂集の著者金忠義の墓碑
其所在地の光景、金忠義が隠退したりと云ふ友
庫洞の景、并に其子孫の宮殿を掲げ、七十五
頁に亘る致証を収め、原文を和譯したるもの
と原文とを収む、

致証は内義湖南外数家の業績を引用
し、中に一二偽書あるかと疑はるるものも論
據あるもの、中に就て考証要を得たるもの三篇
あり、山道裏一、河合弘民、李柳南異の業
したるもの即ちこれなり。殆ど数十頁の詳を悉
し、首肯すべき論據少からず、
北慕夏堂文集は近年現出したるものなれども友庫洞と
ある金の遺族は之れを金科玉條として一点の疑を挿挟
まず、之れを以つて日本式の将軍の血統を誇るの資と充
ておるといふ、扨て北書は何時出版されたるやは山
道の説く所左の如し
北文集を精に上したるは金忠義六代孫の時にして

応祖即位二十二年今より百十三年前すなわち（大正四年
より）原稿は慕夏亭没後百五十六年間秘
蔵しなりしを及壬辰後の時の事なり節度使な
りし汝也可と此終に文を後江原道に長任する
金彦瑞の子孫等の所蔵せるこの等を英集し
て文集を記者しいまと共原稿の一部分は
今高金錫禧之を保存し居れり之れと板木
に上されし文集とは相違せる点多し又原
稿中に記録せるも収録せざるものも
少なからず

為山道が記せる所に拠れば金錫禧は金忠義の
晩年子敬元が枕頭に侍して著録せしものと云い、その原

稿紙の裏に金忠義自筆と称する諺文の歌あり
これは出宗頑化元後四十八年上辞と言へるに徴すれば忠義
北後三十三年を経るを以つて信ずべきも、偽作と忠義
自筆と信ずるとすれば北の迷塊の歌は如何
のごとき、また、北が母に与へる忠義の系図を
金氏日本のものとは信じ難し朝鮮流伝の痕跡歴
々たりといふ、

汝也可の汝は姓なるべきも日本の斯る姓あるを聞
かず朝鮮に北姓あり、二十二歳の若年が三千の
兵を率ひて清正の右先陣なりしと云ふも疑はし、三千
の内容の人は五番の大名なるべき筈なるに、その大名が
兵を率ひて朝鮮に降りたりとすれば、彼と一方なるべき

ゆえにすべて記録に関して疑を記録する三千の兵に就て
金忠義更に何等の事記する所なきは何故か彼は学
問を友とし閑に隠退し居るものゝごとくにして彼は投降
の後銃砲の操術を彼に教へたりとあるも銃
術の日本にある所以を説くに満中にも此点を掲し
得ざるは如何に権輿なりとするか如きは噴飯すべし又謙
和書に文禄の役を以て清正が師を記したりとす
一体豊公の及ばざるは何の故か興師を一部の将に任
するが如き、三千の兵に将たらしめ兄弟たらしめざる也
以上の事項を判し得べきことを特に改記を待つ
るなり河合弘民（文政十二年）井上右仲南（嘉永）
鮮研究会を経て徐孫保（大正）はさらに此文集の内容

に立入りて事実の史的年代と基づく考究することを
なすを以て遺憾とし其の伝説することを記すること一部
を進めたり其の詳細は研究会本を読むべしこゝ
に僅に二三の要點を掲示するに止めん
一墓誌中に河也可は隆慶二十五年官
位三の末に云へるを以て隆慶とは此の稚宗
即位の初の年號なるも其年数は六年とす
さすれば二十五年とは何なる年か六年五月稚宗
崩し神宗位を嗣ぎ萬歴と改元せるを
知るべし、係し廿五年とせば金忠義の
年齢と合せず、係る二十五年なら六年を
除きさらとせんへ、金は未だ現の年齢な

征韓の後へること、なるべき、北碑の振ふ
の材つる所と侍くてあり、
一 著書五底の役を記しなるべき慶尚南道蔚
山邑誌あり、韓城紀略と云ふ、慕夏堂集の
子安八北の書を剽竊したるべき痕跡
あり大觀四年に成れり、慕夏に都尉あり
所ハ刪正加除あり
一 金志善洋風の火器を作へりといふも朝
鮮ハ火器の傳ハるハ以前なるも以前の
歷史上稽へ可き確証なし
一 北他三年代の今ハ事実多し偽書を
証すべき迄

証する比集ハ朝鮮の文人が慶尚著書稿しる人
心を投ぜ作無ものと合ると漫然の著を誇り
徒らに自から高く標置し、偶ま猪雷旋兵の子
孫が慶村に著の強せるこのを捉へ来る首
肯して海路の壱島と云へる花名祖に使用し慕夏堂を利用
指を自ハ慕夏の著しるべきこと
ち梅南冥の弦論
○春陽行乗の時ひとり家に留まる結ハず漫り
に乗ー旦つ電車に乗り、未だ神田を通ハず
田ハ、二三出方に出を通ハず公のもの
唯比僅の左の二書を拾ひ上げ知るべし

一古賀教授手行　一冊

此書教授任書の疑義を糾したる
為二冊に写しなるべし、教授の
朱書あるは二冊の誤りなり、通計八枚
教授の出座正徴と塗抹あり、文の終
りに古賀壽頻首再拜二冊先生
教授とあり、右塗抹に就ては一隅にた
の附記あり
前教授書不立基案只書意所在不
復仔細是以寛改塗乙逆三而有且
辞随書抹不敢之罪敢請寛貸
二冊教授先生の稿故の及するものの

なり、これ如実命と云ふ事なり

一寶暦式鑑　三巻合一冊
寶暦式鑑敢て跋とするに足らず但
落筆者も跋式と称と云ふ也求めて得
べきものあるべき也

○文政の頃人々道に基全盛二十年間を幕末とし
執表出版歴を要す、今の印刷成り来候と
す、二書共に今の市中と殆ども変と相
おく

大正十四年四月十日記

大日本文明協會基金募集趣旨

故大隈重信侯に因つて創立されし本會が十有六年の星霜を經たる昨年末、明治文化發祥記念會を開催するに方り、畏くも　今上天皇陛下より優渥の御沙汰と破格の恩賜を蒙りたるは、本會の無上の光榮とする所にて、是れ偏へに故侯が晩年本會の爲めに致されたる努力の餘慶なりと謂ふべし、故侯が終始本會を以て念とせられたることは其病革るの日特に某々等を病蓐に召し、本會の持續經營を懇囑されし一事に因つても之を見るべし、此れ既に本會員を激勵して發憤措く能はざらしむるものあるに、今又聖恩に浴するに會ふ、誰か感奮せざる者あらんや、謹んで聖恩のしかく渥き所以を拜察するに、故侯の此遺業を深く嘉ぜらるゝと共に、其持續作興を鼓舞し給ふ叡

旨に非ざる無きを得んや、想ふて此に至れば吾人は惕然として懼れ奮然として起たざるを得ざる也、顧みるに本會の賛助者は故侯の遺志を空ふせず、從來本會を援くるに少からざる義金を以てせられたり、是れに賴つて本會は今日の盛運を見るに至りしと雖も此れを以て滿足すべきに非ざれば、今百尺竿頭一歩を進め恩賜を基本とし更らに二十萬の基金を募らんとす、蓋し本會の前途爲すべき事甚だ多く、而して會運は時に消長なきを保し難し、要するに基礎なきの會は終に永續を期す可からず、故に、本會は進んでは聖旨に對揚し、退ては故侯の遺旨を遂げんが爲めに財團法人を組織して基礎を確立するの計畫を立てたり、是れ江湖有力家に訴へ基金の寄附を乞ふ所以也、本會の經歷と事業の大略の如きは之れを別紙に具すといふ。

大正十四年　　月

文明協會の略歴

本會の創立は明治四十一年四月故大隈重信侯の創立に係り、其の創立の趣旨は左の綱領の如くである。

本會は　明治大帝の聖旨を奉じ、廣く智識を世界に求め、東西文明の調和融合を圖り、進んで新世界文化建設の先驅者たらんことを期す。

本會創立當時は主力を洋籍の翻譯に注ぎ、廣く會員を募り、外國の新知識を傳播することに力めた、此の翻譯事業は侯自ら主宰し、浮田博士外知名の學者、其の衝に當り、同年十月より起り、爾來三ヶ年卽ち四十四年の末までに五十卷を刊行して會員に頒つた、之れを第一期とする、次で四十五年第二期計畫を立て同時に事業經營上に一大革新を行ひ、專門諸大家を編輯顧問とし大正三年秋に至るまで二ヶ年間に四十八卷を完成頒布した、次で第三期に移り大正四年秋に至るまで一ヶ年二十四卷を出した、卽ち創始より一百二十二卷六萬七千頁の譯書と編纂書を刊行頒布し、其の發刊書は概ね故侯に據り　畏き邊りへ奉呈せられ、晩學の人や、原書を手にし難き人たちは爭ふて購讀し、爰に我が反譯事業に一大時機を畫し、頗る學界の注目を惹いた。

大正五年本會は時勢の進運に考へ、會務を恢弘し、刊行事業の外に講演事業を起し、又時局に關する研究會を企て、講演と研究の結果を刊行することを創め、社會教育の一助たらんことを庶幾した、卽ち大正五年一月五ヶ年計畫の刊行を始め、譯文を平易簡明に改め、大正九年末までに六十卷二萬數千頁を刊行し、四年四月社會教育に資する講演會を先づ東京に開き次で地方に及ぼし、爾後每年數次開會するが例となつた、尙ほ七年三月故大隈會長司會の下に每月或は各月に早稻田邸に時局研究の目的を以つて學界實業界の多くの有識者を會し、每會一二の講演者を定め四時間乃至五時間に涉る講話をなし、之れに對し質問論議し會長自から批判するが每會の例となり、會員に甚大の裨益と興味とを與へ、會衆は常に堂に滿ちた、如斯くして大正五年以後の會運は漸やく隆盛に向つた。

大正七年偶々本會創立十週年に當つたのを機とし、會長邸に廣く朝野の名士を會して紀念會をひらいた折りに、本會を持續する爲め後援を與ふべしとの議來會有力者間に起り、當日より維持金の寄附者相踵ぎ、大正九年末までに數萬圓を得るに至つた、本會も會運の漸やく進展するに鑑み玆に評議員制を定め、澁澤子爵外數十名の同情者に評議員を囑した。

大正十年一月第五期事業を開始するに方り、每月譯書を頒つの外に、講演竝に時局研究に關する記事を載せたる月刊雜誌を併せ頒つこと、し今日に及んだ、此の四ヶ年餘の間に譯書四十八冊約二萬頁、雜誌四十餘號、時局研究會四十五回を重ねた、此の他臨時に時局に應ずる重要の會を催したことも一再ならずある、乃ち十二年の秋には大震災の善後に資する爲め、各專門大家に請ふて五日間連續するの帝都復興問題講習會を開き、十三年十月には日米問題に關し特に事情に通ずる十數の大家を會して論議研究する所あり、同年十二月には明治文化發祥紀念會を開き、明治の文化に寄與せる外國人四百餘名の功績を紀念するの式を擧げ、且

つ都下五ヶ所に會場を設け、明治文化を批評するの講演を催し將來の文化に資する所あつた、式典には諸外國の大使公使我内閣諸公も臨まれ盛況を呈したが、此の事　天聽に達し、優渥なる御沙汰と恩賜金を拜戴し本會は無上の光榮に浴した、本會は前記外人四百名の事績を錄した紀念誌を刊行し式典に列したる會衆に頒ち、併せて事に關係ある多數の内外人に寄贈した、次で五會場に催した講演をも刊行した。此の紀念會は頗る意義あるものとして朝野有識者の稱讃を博した。

本會經歷の大略は上述の如くである、終りに一事の漏す可からざるは、大正十一年一月十日、本會の創立者である大隈會長を喪つたことである、故侯は病革るの時、本會の前途に就き遺命された程それほど本會を終殆念頭に置かれたことを思ふと、他までも其の遺旨を體揚せざるを得ない、依つて同年三月評議員會に於て滿場一致を以つて令嗣信常侯を會長に推し、爾來會運は益々隆盛に向ひつゝある。

大正十四年四月

十二行

○校畫禮讃が漸く出版されて手元へ達したれ
ハ稀書複製會を立て直ちに同人が版畫と

就てさんく部數を今の倍に増め
ようとて、二十四五部程の版畫のものが完璧のつもりである、中に
版畫を外れたものもあるが、書名と就て異論もあつ
たが、自分は是非此名がよいと主張して種まの比較
もあるが、此の創立者の自分が同人と執筆を勧誘
し、可なりの力を費つて、同人と複製会員とも
うんを出版するの力もなく、六出版したる外に海布の
方便もなきいあるが、此の海布の
出版されたとき、此年中に出来る筈のものが、ヤツ
ト今頃出版されたること、あまりにおもしろい
味があるが、集めようとこれるとの方面に版
畫を送いたるこんなに無い様に思ふの一種版

書と就ての随筆と見るべきものである、自分は教化按摩などの浮世絵と云ふ数が多く持□とうつたえんをアラワスポク書いたが、自分の骨を折つたのと、元々北斎を世に出すの討書の方にあつたのに、

□昨日の浅草を数巻し浅草庵の二書を賜い入る、

一日本山海名物図絵　五巻　合一冊

此書は寛政四年の版で平瀬徹斎の編輯に係る、巻首に時尾淡々の序あり、内容は図書が主となつてゐる、谷川光信の書画に成り各図に五行充の解説がある

十二行

こは一巻は金沢銅版屋の行程百を収め他の四巻は各般の物産に亘つてゐる、類似の色紙のようなものがいくつもあるが、多くは人を後に出だしたものであるひし北斎も北斎ひはれるいうのであるとう

二冊

一鳥の跡

北斎梨本義睡の撰輯す係る和歌集にて元禄十五年江戸平尾吉兵衛の開版にて

□すると云ふ、北斎集中より義睡自身の和歌もうまく散見す、直に義睡の真贋を認められ、梨本氏の義睡に関する書物を便利とし購求す、北斎も今日

棹歌のうちより

○近年支那にも本朝にも無やうに六朝楷法おこり、六朝拓本を無上の手本とし之れを学ぶこゝろあめるに、大体ふるへひごみといふひもうへが石工が刀を揮つに、その峻峭なる字書を六朝の面目せしと、強て毛筆にて、その峻峭なる筆書を写すことゝきの誤りもつてみる、北魏支那ひとし廣ゆ[illegible]の板を原石と錯意も[illegible]板を彫ることゝいまゝ無つに、多くの時石工が原本を勝手に宜しく勝手に刻したとゝふから、決して法帖をの校を彫者の注意を得つて刻したこのひはるへ、即ち金石に刻しに[illegible]の筆意とゝふからも寧ろ

意識を欠ふべきものである、随分石工が字書を誤つて刻し此例が多く[illegible]時の碑の面ゝを見るとすると、筆意や彫工の名の外は讀碑者の名も刻してある、則ち彫家の心意を検するこの処を置て拓本の如き筆書の字があつたのに、見ても構はず拓本を知らず六朝の如きとして模倣するこの法の限りなき

○篆刻家棹歌日年が[illegible]大津絵をとゝまるのもとゝ陣列すること[illegible]自分がこの肝要とこゝろ吹聴の口上ハ左の如くである

日年氏の大津繪に就いて

我國では稀に見ることではあるが、支那ではよく印人であると共に書家であり畫家であり又詩人である人を見る。印人として既に一家をなしてゐる日年氏が繪筆を弄ぶといふことは何も不思議なことでないが併し一にも二にも支那々々といふべき筈の人が殊更日本らしい大津繪を描くといふことは一寸妙な氣がするけれども燉煌石窟の繪畫を見ると、同氏が宋元以後のものによらずして大津繪を撰んだといふことに就いて如何にも尤だと首肯することが出來ると思ふ、秦漢の古印の渾厚さに眞味を感じてゐる同氏が、燉煌石窟の繪畫に酷似した古樸なる大津繪に眞味を成したといふことは尠しも不思議でないと思ふ、寧ろ其處にはじめて同氏獨特のものがありはすまいかと思ふてゐる。

嚴谷小波
市嶋謙吉
高田早苗
坪内雄藏

四年をうつす事ありしかども自家の図案を深め技
いよいよ三度の個展を開き毎年新しき考を示しに、それは
ますます凝つたものである、色紙形に自然美
さくらの枝を墨画にし、それを朱筆で
染めて、色どりの工夫をしたるは、及故味の
しぶい味のおもしろ味の色がかいつてから、端手な味
が出て、集まるもの、来を拍つた　四月廿日の録

○彦坂氏の先輩達が毎月会を会する飽満会
社といふがある、近頃新山陽が縁となつて富士川游氏
りあ氏が社員となり是亦毎月会を開く、山陽の法
をしてくれとの申込もあり、時々多遠亭
に於ける同社に臨んだ、此会の新しき人もあるとて和

田長雨氏小鷹狩元凱氏井手三郎氏秋山雅之氏富士
川游氏など時々来る人で其三年迄慈恵病院に居
して又いろいろなかゝり名家を見ることが出来
うあるし食後聊か山陽流をやつたが時日が無いので
近著の映画俳優を止めて、今貧乏で困る北村を
特撰した人や、特撰を勧めて貰はれた人も
あつて自分の一本を含む全の絵の如く左と分
欲と人れ物を収めて紙を貼ること
○四月廿一日の記　四月廿一の記
つき余も北方面の共集家の巨擘たるビゴー(Bigot)に
皇后陛下と同じ趣味のあることを左の如くいふて
ある、

北陸英国現皇后メリー陛下の仲徳に感ずる
歌意を表する為めに国民の名を以て献納し此人形
の御願としたのである、僅か立尺し八尺の小模型で
あるが、豊臣建造物、私の外郭ばかりでも、六重四層
創の装飾家が什器が鹿府の宗具かる自然
寺やシーボルトの日常生活に基づる設備
が一切業美をかたどり小さな家屋と釣合ふ大
きさに具備してある、其中に鎧る牡丹五国史設
が有るが、天井の装飾や扁額や椅子や卓子や
織毯や文房具や絨毯や統べての設備が美をかたど
して釣合てる様申しまする及べず、四壁の棚し
満載せる人比国吉が何れも此の人形の国吉家に

十二行

横山雅男　伊藤正雄　小田平義　秋山正八
宮本二七郎　長瀬欽司　山下恒雄　江藤玄三
橋本太吉　山科禮蔵　道家充之　三上義夫
西川麻五郎　日比野傳平　吳秀三　村井二郎吉
小早川常雄　船越光之丞　早速整爾　小林房次郎
煙谷忠　佐藤清勝　下瀬憲造　奥田寛太郎
名川侃市　大井静雄　山田翠雨　六角紫水
山崎榮一　高野熊男　勝島仙之介　高楠順次郎
龍口了信　藤田繁之　永井潛　刈米達夫
河野元三

常務委員

花井卓蔵　秋山雅之介　下田次郎　高島平三郎
尼子四郎松井　茂濱野知三郎　和田英松
眞田鶴松　富士川游

主事

常光浩然　清寺　瀬

飽薇同好社規約

第一款

本社ハ廣島縣下藝備兩國ノ出身者竝ニ兩國ニ縁故アルモノヲ以テ組織ス

第二款

本社ノ趣旨及ビ目的ハ左ノ如シ

一、社員相互ノ交際ヲ資クルコト

二、藝備兩國文化事業ノ進捗及ビ發揮ヲ力ムルコト

三、藝備兩國先賢ノ業績ノ顯揚ヲ圖ルコト

四、爾他緊切ナリト認ムル事業等ヲナスコト

第三款

社員ハ本社ノ趣旨及ビ目的ヲ贊成シ社費トシテ毎年金參圓ヲ醵出スルモノトス

第四款

本社ノ事業ヲ審議スルタメニ在京社員中ヨリ委員若干名ヲ置ク

但便宜地方ニ委員ヲ置ク

委員中ヨリ常務委員若干名ヲ選ビ、本社ノ事務ヲ主宰セシム

本社ニ主事若干名ヲ置キ實際的事務ヲ處理セシム

第五款

本社ノ機關トシテ毎月一回「飽薇」ヲ發行シ、無料ニテコレヲ社員ニ頒ツ

第六款

毎年四回委員會ヲ開ク

但シ必要アルトキハ隨時之ヲ開ク

東京府下瀧ノ川町西ヶ原八百四十二番地

飽薇同好社事務所

委員

小鷹狩元凱　福岡佐次郎　土肥具三　平川武三郎
高羽富士夫　岸山義　山科樵作　清田政
横山雅男　伊藤正雄　小田平義　秋山正八
宮本二七郎　長瀬欽司　山下恒雄　江藤玄三
橋本太吉　山科禮藏　道家充之　三上義夫
西川麻五郎　日比野傳平　吳秀三　村井二郎吉
小早川常雄　船越光之丞　早速整爾　小林房次郎
煙谷忠　佐藤清勝　下瀨憲造　奥田寛太郎
名川侃市　大井靜雄　山田翠雨　六角紫水
山崎榮一　高野熊男　勝島仙之介　高楠順次郎
龍口了信　藤田繁之　永井潛　刈米達夫
河野元三

常務委員

花井卓藏　秋山雅之介　下田次郎　高島平三郎
尼子四郎　松井茂　濱野知三郎　和田英松
眞田鶴松　富士川游

主事

常光浩然　清寺漸

北畠英國現皇后メリー陛下の坤德に翻する

鈞令つれ豆本ひあるも其中まん古形や坊ヲ收蒐
のものもあるらしいが十まの物と此の人形の國宝
に値くるものもあるも此つれの中ある特殊新の何のも皇室
の物物を似合まハしい茶道術鑑を極めてみる
が中まんに物を滿洲優雅のものもある三藏
の稚拙ハ聖を印めて厂史地誌帝王時代聖
賢の名藝術家の傳記古今の著名人物
記集等ひあるが特と言ても由も繪劇に
土井ウテーカーやフレースフーのやうなものや
數四の代表的な繪や絵やから成や特記
すべきハ現代代表的家の自筆等の繪劇
二ヲ鈞冊ひ等、豆本皆遠来も変こ別ても極まる

(A.C. Benson "The Library of the Queen's Dolls House" より)

○昨日京都に旅行中し和田萬吉氏の清見潟の
巻の摘手なるに細者なる余が直者に就ての話
録に頼家が山梨山形の愛の買戻しを手古摺り
れて殺いんと田鶴や、安東時軒と廿一年頃和田が客中庸ん
も、そのべく、葉そかれてこいる牧めあり、
○板書禮讃の内三村作治の旅宿の中に以和文
字彫刻に関し左の記あり

明治
以上ノ快筆何ドナリ早ク世ニ接セ
ンカ為ニ稿ヲ織イ爺ニ慕
ハンテ逆賊ト称セ同性ノ恋ヤ
近来流行ス尤ニ華敬服ス
ベシ但ハ近業ニヨリテ其原
ノ加ヘ平生シ後テハ動者ハ皆唖子
の納痴癡乎定タル洛帝数度ノ変ヲ経タ
毋丹ナラン廿卅ノ頃ハ秦年ナラズシテ
生田大巻ヲ〆シ 月十五日旅行ノ記 男喜書

初い虎本風ラ
出来ル源義と
とを題ニ彼ニ
難ク尾イのう

山吉風
足つき
南の仏
う鈎の
業の押
意の方
泉津の

十二行

○月ハ京都ニ旅行中ニシテ和田萬吉氏ノ消息ハ知ラズ
今日摘手ヲ下ハ細方ニ書ニ就テノ話ヲ
録ニ頼ガ山形山形ニ帰ル事ノ買ヒ〻ニ手古摺ル
赤手ノ安東時新ト廿一年頃和田ガ客中ノ高人
ヒ殺ハレタ田鶴や、その人の性格やらハ、参考と
もなるべく、無ものかなどこゝに収めおく、
○校書禮賛の内三村作治の雅号の中に故相文
子関刻に関し左の記事あり

明治
故相
西山氏物ニ関リ龍安寺、等持院、
妙心寺、仁和寺、大覚寺、清涼寺、二尊
院、広隆寺、梅宮、松尾社、祇園、車折
社書歴観ニ少カラザリシ、別寂多
ヘ[illegible]カノ花アリ真ニ花ノ都たり恥ジザル
の納
午後初生ニ出、変化ホトニ見ト
あ井田レキモノ坐ニ空ノ四宿ヨリ車
生田中後殘ノ高著技部ヲ通後寂
初ハ京
五五九頁前行相家ノ買戻ノ条ト
出来
ニ及テ安易医師（精軒）ノ名ハ着
とて
華ヲ見、坐ニ明治二十一年頃ノ昔ヲ
難忘
恒和ト密慨切ヲ覚ヘ、トヤ六四年
夏休初テ越後、奈良ヨリ徳島ヲ撫
テ三本木月波楼ニ宿ス、家兄桂井
（当時オ三高校教頭）方ニ軒ヲ
其時近変トテ安藤老（七十位）（富南者
ヨリ軒トシテ名高アリシ人）ヲ迎ヘ初診ヲ
四五日提案長敬アリテ回陽ヲ以、其
節ノ私意ハ大抵ニ世ニ公ラモ往日老
ノ易ヲ忘レ、頼氏ニ死テハ因業老爺
ナリシナンヾキモ他人（殊ニ患者）ニハサ迄ニ
蛇ハレキ人ナラズ寧ロ型切丁寧ニ老
実ニ頼ヤウニ感セラレ、高説ニテハ尤ニ強
総漢ノ如ナレド是ハ当時ノ頼家ノ出方ニ
滑ノ回ヲ嗣キタルニ依ヤトモ言ヘ、精軒老

下五十年以上のなれば世のすたれも可キヤウナガラ若キ人ガ悪名ヲ流テ百代ノ後ニ伝ハラルヿヲトロ（バ）人事ニモ非ズ大ヤウ様、但高説ハ山陽ノ故実ニ無キ様ニ思ハレ候ヘ共西華ト云ヒ、只奇遇ヲ覚ス、一寸驚シ居ル様ニ見ユ、ソレニ暴貧ノ風ヲ生ヤウ而高文無出会奇ヲラハ山陽先生

此上ノ快華何ドナリ早ノ物ハ様ニ

ソレ故ヤウノ仏地ハ織イ爺ニ慕

ハレテ迷惑ト程ヒ、ニ性同性ノ恋ヤウ

位不清ル尤ニ今年敬服ハ

ソノ名ニ世ニ但ハ近業ニヨリテ其原

ソ加ヘ、耳生ヲ後テ不動者ハ盲唖乎

痴痴乎宮ヲ治希数度ノ貴ヲ段ス

ナラン廿冊ノ版ハ来年ナラズシテ伝

大巻ヲ〆シ　四月九日旅後行ノ記　男義

東京市牛込区
東五軒町卅五
市島謙吉先生
都京 14 4.20 前10-12
郵便 3 SN
逓信省發行　印刷局製造

明朝と云ふ書風（書の流派なるのみ）に仏つき
朝と云ふ者、古代家の言ふ所、南の仏
正隆の手の出と同じく、文字の南り鈎の
如くなると云ふ、又明朝の様書の美の押
へを判未御ハ精の
の絵りと云ふ、絵書の
面井文弘氏の話　右洞津の

(A.C. Benson "The Library of the Queen's Dolls House" より

○昨日京都に旅行中、和田萬吉氏の
今日の摘手
紙に報ぜ
れ手、安
心致いたし
もそうべし
○板書禮
子彫刻に

東京市牛込区
東五軒町卅五
市島謙吉先生

3 銭 SN
京都 14 4.20 高.10.12 下
逓信省發行　印刷局製造

十二行

明朝と云ふ書風（書の流行の名）に仏つき
明朝と云ふ事、古典家の言ふ所、あ南の仏
心隆の手のみと同しく、文字の書の南り鈎の
いくさると云ふ、又明朝の模書の書の押
へと判木師の書の風といひ、絵書の書
の絵りと いろいろ鹿とりことそ、右田津の
あ井文弘氏への話
生田可久君の話（去月十一時）明朝と云ふ書風
初い唐書風なりし、吉茶の源義明朝も
出来ぬ、源義と云ふ人、一八源氏源義
とも醫者の娘に出て、家の顔に北河の
難字庵イのうしろと云ふ七の人、養、新の時

ハ拙く見られと雖り上げは此の書を見る人は
此の人の風を中略文字書き、一人ハ森源兵衛と細
川家の家来なり、此の人ハ義明の時ハ義く見
文作ら、雖りしハ江戸さりし、北後伝大右
衛門行ハ、森谷作大右と云ふ能師の例
めしなり此人ハ蓮池清の守殿に仕める松久
兼義伝く家、川村の朝と云ふハ川村某の剣
めし風なり、谷の井戸を掘る者
井の忰川田陽右右衛門、又清水
朝と云ハ、篠原清八郎朝明と云く
り、先代ハ田六左衛門と云ふ（天神山と云ひ手の町住なり耕ありて摩吉郡住北八の手
なるの子なり、此ハ酒井筑右衛、亀井戸の

十二行

余さんなる者の朝りをなりなり
可久生田鑑次郎の遺稿の内の系図
并に摺師系図なり、此ハ三河作清方と花ス
余なるを、収めて、収書礼儀書に
附するものなり、坂木摺の系譜ハ別
の書に収め置かるべし、煙滅と消すべきなり
実に大切なる系図なり　四月朔日の記
能版の名人と云ふべき木村嘉平ハ今五代目で初
代からの版年を見ると名ハ同じなる其人の異な
ることかなり
初代　木村加平　文政六年八月十九日歿六十八
二代　木村嘉平　天保十一年九月十七日歿五十八

花

三代　木部嘉平　明治十八年三月廿五日歿六十四

四代　木部嘉平　明治十六年十月十八日歿二十九

五代　木部嘉平

なんと称り初めは加平と呼び二代に当り嘉平と改め二代目より村の字を用ひ三代より部の字を用ひることとなつたが、版刻を継続するの一標目なり

○板書礼譜の内三浦休清の東江源翁に就て

語るまた左の如し源翁の素性と洒落本の作者なりしことは余の初年なり

異素六帖二冊、寛政七丁丑歳四月吉日、書肆東都浅草御蔵前茅町二丁目六河永次郎版

十二行

本材木町四丁目紫田弥兵衛門とあり、これを洒落本の祖とす、東江源翁の心と伝へ、吉原大全八百和五年刊とあり東江三十七歳の時と言ふ、板下全く東江の自筆なり、異素六帖刊行の寛暦七年は東江廿六歳の時と南ゑ、この版下は関家の自筆なり東江の筆なり、天明六年の京伝忌さしひ学ひし

松江細鱗を石亭席上を称賞と入れる、北松江といふは元銀流の坪なりしか、能書の京風と同志ひ今は江戸一の書家となれり

とあれは銀流の出か、吾嬬素の山野大武撰と称する碑は友人平鱗源鱗初は不鱗なりしとあるなり

東江伊勢守殿の蓮業者の所を伺内武鑑
と何子かを識し学ぶ伊勢守殿の係りなこと
○おうしゅ文化の頃と江戸表の貸本屋が多かつた其頃
浅山といふ人の講本や合巻本や隨筆の類を多く
續出した、如者家は一々特人ことが出来ぬ程多
くの出かを行さんに成たしかし偽が今の用紙と比較
したらとあまり高くもなく、数少い貸本業
が繁昌をさせを得たのである、文化年又江
戸中の地名集者は六百五十六人と注されてある、此
内は家に図書と積み人の撰擇に任したあと
唯此風呂敷と背負つて歩いたものの別も
あらうが、決して少ない数と云はぬ、其若干の板

書籍類に記載する者に依ると左の通りである
日本橋南組九十五人　京橋南、芝金杉、
鐵砲洲築地百九人　西ノ久保段々麻布
芝二十八人　芝金杉南品川三田白銀二本
榎三十八人　本所組七十四人　神田組六十人
外神田湯島下谷本郷二十四人　浅草四十人
本石濱川四十人　麹町組一番組三十九人四
谷組二番三十三人　小日向組三番三十三人　九
十二組拾人数六百五十六人
○小説其他戯作の著作者の名の傳はつてゐるものは
多く、幕府の御家人か内職に書つたのである、勿論
著者の書つた家もあつたであらう、大抵者自分が

葉鞘をうがたんとする。水荒樹の説ハ、古くハ書工の北尾重政ハ葉鞘を白紙に淡青英泉ハ同様であるに、一九の著作の大部分ハ自著と称くらく、役の原稿「一ノ宮市り眼」に一ヶ所も朱点の注文のみのもあるを見ることあるべくらと、松亭金水や善米市郎ハ葉二から作者とするに人とあり、八島定国も英泉と同じく書もて葉鞘も作者も重なるとみる

○川柳に　惜らしい話西川ハ鞘女にかき」とあるのは言ふまでもなく春画の婦人の面貌をいふにて、西川ハ祇信であらう、どんな春画にも交接婦人ハゴゼしかんをみる、ひとり西川にもしよべきものとも云へるが、祇信の春画ハ特に詳細を極めしにかゝるコンナ川柳も出たと解せるを得ないハ、祇信ハ決して無節制の放蕩者ハいはるまじ、とこまでも真面目で而して節りを採つたと云ふもある、春画を成したるものも見る人間味を実面と表

○種彦が天保十三年六月十三日腹しにのち田舎源氏の出る公儀の改革が伊勢の殿様と共に一説ハ遠名で也原因を云へとしてあるとも三村氏ハ立ちてみる北斎の浅草体の三冊物の彩色摺りの絵入で、人物

が流石に活動してゐるとふが無論名を著す位に成から春書いてあるとう、貝の中に北北者を寄目しきい、おそらく一説として美に挙げる

○曲亭馬琴の名の出典に就ては、馬琴大名を偽る故支那の古書からそれとり出し強てエラそうな出典を挙げておるが、実は此名をつけた為は、滝沢の[illegible]とうとう、都向をやうとも考へた位、見識もなの無の此時であつたから、其頃馬の字をつけた滝釈迦が時めいたのを、それをあやうとつけたと自分はかうも左様思うてゐる、西芳花人の解ひは曲亭ハ廊馬琴ハマコト、といふ位ちことであらうとうあれが、これも一説である、彼れう都向ひとうとして

し京傳に比べたことが京山の能木数之[illegible]年紙の内にある、都向うとうとうとして馬琴の或る年代は他の戯作者の日の様廊を四主[illegible]あるや嫌字のことを方いたは勿論である、此等の戯作をもあるは(私)廊の子孫に当しうけんべうとうあ、彼のう都向うとうとしたのを、(私)廊と出入の方便としたるあるへうとは(私)の説である、それは何のである他彼の戯作者時代にくるへのまことを名とした解してもう[illegible]ち無理はうへ、すべて誰のもエラうとうとも、無闇に故うつけて名をも経歴ても装飾し皆ごうるのるいつの世にも同し人情である、

四月廿三日 志

霞西亜文学を完[illegible]都と[illegible]仏蘭西が

二葉亭四迷と名を余したのも、その字を少
けハ丈に叱られて、貴様の様なものハ、リタバ
ツテシメーと云ハれたとか、それを紀念する為に書れ
たのハ此名をつけたと本人自から告白したのハ浜
泊の汐ハ、ひ、エラツテうつたら、あーろ地金をさ
らけ出す方が、却つて奥床しく感じたらしい、
ハ馬琴とハ極反対の例である。
○山本北山が芝石の資本家があつたといふことハ山田が
て活判記問題から儒者同志の論難が人身攻撃
ミたいなり、一方から北山を高名の人物と賞讃つれと
あるのに、知つてゐることがあるかい今三村外治の紀
する不注意の命を失ふ事もあることが知れた

十二行

芝兵衛集、市川芝兵衛初名数しに、河原崎
座にて興人の顔見世金主なくして興行延引せし
とき、北山先生山本素行といふ人、市川芝兵衛
を殊のほかいきれさせ、もちろん報文公之
助、先々芝兵衛と名数を上るなり金を
出して老かと御話数あり、時元素人ひ早速
芝兵衛を名数に上しが、外役者の顔なく
市蔵の所、二階に番三人、是まなりを
利のして国前出勤のお話をすることなれば
番を向ふ隣石しなる五代目白猿と再勤を
すめ、漸く番頭を上げなり、在但跡らしとて、北
山先生のおい迷と金主あるも初日を出すと見る、

北山自ら容貌高龍風に似てゐるとて、親しく天
物をいふことなどもあるし由、首像を見るに全く
看り

○外藩の記せし皇國の紀事を英文にしたるもの松下
見林の異称日本傳今も流布す、山本北山の日本外
志は同じく外書を引き日本紀を偏輯したるもの
なり故に刻せられず、富士本として存するもの缺
ること完本あるを少かず、北山の門人三島蘭臣
朝川鼎大窪行等の手を校錄したるもの北
山の手なるべきは僅々ありといふ、北山が引用書目の
首端に載する所左の如し

松下見林異称日本傳、引用書目 僅一百廿五部

余日本外志、除此一百二十五部外、引用載日
本書籍凡三百餘部、併異称日本傳引
用者、將及五百部矣、孝經稽 主人識

異称日本傳全部十五卷、日本外志全部三十卷
外志廣日本傳、異其体裁、增其實、拾其
遺漏矣、主人又識

北山の外志の規模若し大なるを見るべし、松下見林
の時なほ北山の時参考書目を得ること便なりし法
果信大の書を得ること能はざりしなり、唯北山本の
流布せざるを遺憾とす

四月廿三日記

○役者の似顔を描くに錦絵を「大首」といふが如
く、とんと役者の顔面丈を全紙に書いたるものなり

は後者の顔が凝視の前とうつることなり、勿論之
まで各々の経験と変遷とあらはるゝ、胸を描
いたものが一歩進んでこゝまでもつれる者なり、又芝
居は舞台をもつてゐるので、たゞく野郎の面顔をうつす
あつた時代の感化も手伝つてゐる者なりかゝ
思儀をこゝろとする後者と
美人絵をもつて大首が興
はいつ誰れの始めたかは
政からぬとをいへども四つ下の四
に実政未だ皇国つゝ四政といふ絵のあり京門
高弟花の弁長中山高三のお七を大首の地
る似顔国扇を出し、其後錦絵も後者の夫

首かきなるは、此時なりも此まるとあるは又桂川
南園の紙屑花るも略る日板のるかを吉かんをみる、
一説に国政は似顔をかゝるとは長しをみるとが身体を
うつすことをうつすことの下手であつたのだ、顔顔ひうつを書き
後者は国扇絵をかゝる者いとも云はんをみる、
○自画自刻といふことが国政者の主観を徹底的に
あらはす大切なることは言ふまでもなく、日本ひは
木版彫刻が其の芸業家を元板又、まんを飾り
芸達しかゝる、切つて自画自刻が行はれるて霹
こ在ては可なる行はれ中と進んでゐる板かるいく
ら刻が上手でも他人が彫るとなると作者の主観が
消んる、今後の日本絵と一種洋画の行はれる天地

まハ自書自刻の行ハんることハ即ちしい、こんなに就て自分の考へ（ゴウは、支那に於ても日本に於ても古来から自書自刻の行ハんとある唯一の例ハ印刻である、書と書とハ通うけれども、客観を交へずして彫ることの例とすべきものである、自分ハ筆者自ら刻し、比金石の九ハ刻するものの印刻もあると云ふことがある、今又ここに自書自刻の様式として四月廿三日記

○左久良の木が日本特有のものであること、共性から考へて厳かなこと、金剛石のように仕立てられて彫刻や歴代を忘れることハ、皆日本国民を代表して、国民性の誇りとする所を北樹が語ってゐる故に思ふが、当時けがのべきの芽の樹が木版として世界

無比の佳良のものであるといふ一事にもある、北樹の版を彫つて出来栄のよいものの無い日板面に織緯がちく、堅さから彫つても揺から彫つても力と潤沢を生ずることがまハ、軟かな板比が軟うて失せず、おのづから堅味もある、浮世絵を彫ることこんで無けれハ、フワクリーに味が出ないまハ、浮世絵の絵版が死者の芽なを遂げたのも北の木のお蔭である、但し昔ハ伊豆の梅の天も佳良と云つた、それゆゑハ梅と絵くて佳種いのるへと云ふが、それゆゑも元も木版と云ふことがある、日本の文化ハ、北の樹によつて表達したといふ証言なり、文字の為め絵の為め北樹がめ多く伐りられたが実に莫大のものである、北樹ハ日本の文化を佳めの為め

授けられたものなれば、真に文化未だ及ぶべきことを
さくらの礼潔市にて かくなれば
○四月廿三日記
四月廿三日記
○四月廿四日　三枚共版元店前五階と棒鼠の年代
大津絵百帖陳列このさい別の見る、自分お友人三人
推奨状を書しなる関係なり、緑園上一帖位の賞
八枚ばかりなれば義理もなるべし　別品中なる優のあき
こと一帖を贈り、こんい春の神社の石燈籠の
刻字の新本を志摩列とするまでなれば火
鉢の飾白日年の亀紙大の方なる絵春の
社の図を巻頭しなるもの、此拓本も利用
なるもの一種の版味と働きとを有す、此石燈
籠い慶長某年の刻字あり、余が金石版味を

十二行

も投ずるものなり、大津絵と金花、用と鑑とのこと
とく解る縁遠きものなるを、いかく相和さも
なる日年の働きとなるべし、拓本い絵と相和
せしなるべきなり物と墨に拓しあるべきこと
る版味志摩表面版味と雅つたこと多くなる
なる却れを巧みに元り合ハセ、絵を引立せなる
ものとなし、例へバ紙の絵と波の拓版のある彫を
用いなる、此の絵を道中記の図を志摩列に用
いなる、鷹匠の絵を用ひ、しく地誌の図を用ひ、
ねの図に縁のある古刻を用ひなる、或ハ細見
の断片を用いなるなり、中まで面もしろし日年
古刻を英国にて版味をなし、その不拓す

41 雛 その二
42 かりうど
43 如來樣
44 ねはん
45 不動樣
46 萬ざい その一
47 萬ざい その二
48 竹に虎
49 奴 その一
50 奴 その二
51 奴 その三

92 屏風 その一
93 屏風 その二
94 屏風 その三
95 屏風 その四
96 屏風 その五
97 無双男羽織 羽二重
98 無双女羽織 絽縮緬
99 無双女羽織 絽縮緬
100 丸帶 羽二重
101 名古屋帶 羽二重

（以上軸物）

大正十四年四月

東京

三越吳服店

るもの者と多し、北百幅いまの古製ゑすべて
巧みの技法さんなるもの、余の出品なる掛物
こハ、こゝやしなるもの不似合ゑゑ掛本ちゑ掛
けも得るべしと、さてこゝ前掛のものを選び
外国、日本の絵ハこれらいろ〳〵ゑ出んハ、物
こ見話を掛くるもクダ也、たゞ目録を收めお
く

○四月木曜三紙を訪れ写物祇田をゑ）き村
は青畝ゑ黄表紙数冊を繪ハ、皆生本
也

一美玉恵玉 一冊

一恵現後宿人間一生胸算用 一冊

十二行

楠瀬日年氏大津繪展覽會目錄

自四月二十五日
至同二十七日

1 腹つゞみ
2 住吉踊
3 中村七三郎
4 辨慶 その一
5 辨慶 その二
6 行水
7 鷹 その一
8 鷹 その二
9 懷手
10 風神雷神
11 神鳴り その一
12 神鳴り その二
13 うづら
14 角力 その一
15 角力 その二
16 鬼の念佛
17 扇賣り
18 青面金剛 その一
19 聖者 その二
20 聖者 その二
21 置手拭
22 古今新左衛門
23 藤娘 その一
24 藤娘 その二
25 藤娘 その三
26 仁王 その一
27 仁王 その二
28 娘
29 人形遣ひ
30 槍踊
31 若衆 その一
32 若衆 その二
33 若衆 その三
34 お小姓
35 矢匠
36 ほうづき賣
37 牛
38 二朱判
39 伊達衆
40 雛 その一
41 雛 その二
42 かりうど
43 如來樣
44 ねはん
45 不動樣
46 萬ざい その一
47 萬ざい その二
48 竹に虎
49 奴 その一
50 奴 その二
51 奴 その三
52 大日如來
53 不破
54 紅毛人
55 傘美人
56 暫
57 御所人形
58 猿若
59 野郎帽子 その一
60 野郎帽子 その二
61 笠娘
62 花賣り
63 花川戸
64 お國
65 鯖大師
66 鳩
67 三番叟
68 猿廻し
69 春駒
70 男舞
71 節分
72 鷲
73 頼光
74 船頭
75 達磨
76 塔 その一
77 塔 その二
78 菖蒲太刀
79 鷹匠
80 清正
81 押戻し
82 女成寺
83 道藏
84 地船
85 蠻人
86 唐美人
87 瀬川帽子
88 お杉お玉
89 咲いた櫻
90 大盡舞
91 奈良繪
（以上軸物）
92 屏風 その一
93 屏風 その二
94 屏風 その三
95 屏風 その四
96 屏風 その五
97 無双男羽織 羽二重
98 無双女羽織 絽縮緬
99 無双女羽織 絽縮緬
100 丸帶 羽二重
101 名古屋帶 羽二重

大正十四年四月

東京 三越吳服店

十二行

一酒玉　一冊

以上は京傳の戯作也。寛政二年京傳が美玉悪玉の黄表紙を出せしが、その四〇儀の時好に投じ、勇躍大きうる因一意百出をやきて出すこと、三馬其他の作家も模擬心を生ずこと、恰義太夫の流行するが如く、心学の如き勧善懲悪主義が滑稽的の形をあらはれたるものの如く、後世善悪両玉の軌とする所の京傳の才華に拠ると云いさらば

滑史、

一 平仮名銭神問答　寛政十二年 京伝 一

一 怪談摸々夢字彙　享和三年刊 京伝 一

一 人相手紋裡家算見通坐敷　京伝 享和三年刊

一 廬生夢魂其前日　京伝 一

一 胴人形肢體機関　馬琴 一

「人相手紋裡家算見通坐敷」は人相と手紋とを各頁の上欄に図して其の絡白に解説別にいろいろの図あり、皆滑稽を弄したるもの也、人相の内に北條道「ぶつおもと」といふ三ツ目の面をかき、手紋に財布を描き、けんくわをはずる」これする鉢とすりこぎとを描き下に泉風呂を包みあり白人の姿下に三くむつ子を書く図もある也数多して「怪談摸々夢字彙」は八巻首に化物の字を数多体に挙く 姥「ウバ」ととて尾ノ…は婦

リッコンシンペンニツノハ心ノ鬼」ト云字ナリ 顕ト云字ニテ「顕カミラノ上ニ皿ノイエハカカハ」縉 ロクロク首ナリ トヨムバケモノハ心ノ迷ナリ 丼 井ノ中ニ皿ト云ノ字ハサラヤシキトヨム 迷 バケモノ

の如きいふかいろいろ生てゐる、本文皆な妖怪を借りたる例の滑稽にて笑ハせる。「胴人形肢體機関」は人間の肢體をいろいろおもしく画し且つ話しあることなるせ「さるまなこ」とある紙一杯の人面の両眼をよくみれば猿が二疋描きあり「坊頭ゐむり」とある人の襟足は僧ゆしたる処「気」すなわち大きな屁を後ろ向きにて出し其の背に腰掛ろうとするものをのせる図あり、

と云類まで消滅を来すこと例のごとし。
○文三年前石油時報の社説の掲載を任ずる其の月刊
施行を余に陶書に小特産品二ヶ年
ごとに登載しなることなり、余は折々の稿を内山著
三の著作掲載せらるるもの、石油のごときもつ施行に全
く縁のなへ動る陶淡小印つて学者の人に載せし
初めは一ヶ年掲載を約束しかば是れ又
も一年と云へと終に三ヶ年を掲載続しなるが、
此頃又も亦と頼まれ、なるかと雑俗掲載と
云ふ標題を以て共に前回のごとく国吉氏に
就て又なり聴かなしとおもしろく感じなるまで内
特に今の人の見を異にする所を発んと亦一

年丸うるを続けることとなる、内山の著作を
機とし一回分に接ぎ、其後左の如
四月廿五日記

日本の名花なる新発
大名の便宜　行列中に用ゐる器
花器隠匿の機智　三個の霊丸
大西　めん鬘　車鬘
一さくら
一シト筒
一学文
一役者のかつら
一巣の形
一あえの大小
支き絞り形同しからず
沼田の藩主を完への為
一慕夏書集の偽出
一外人の見る幽厨の火災
沼田の藩主をもてなす

一英皇后のす珍本　袋冊子小四

一クラワンカ船

一廣物家列傳　西翁自文　見ること

一自畫自刻　印刻のこと

一曲亭馬琴二美人画譜四巻　附　江村出流の出来

一中将姫と支那版　市麻美多羅

一沒本家山本北山

一北子教育家としての漢洋

あとハ略と言あべし

○大注文ものと細君の肖像が如あと紙のあるこ

る多くの物ハ糟糠の妻であるを先ハ入つて

シワクサ遠さんにかから、面貌の揚つ四てみる例め

へ甚ものうまへ、考もすること略る容色の傷んれのがあ

る、一見きえい左り後の本妻あ互りを判断をも

誤つことがのうまへ、北吹も「高崎邦輔」が大注文ものの

ルの中、細君の美かい頃と思いんる宮玉が多ッ出

ル、一見性拙ひものへと思いんれと、日記が「高崎文書」

部者ひあるから自動車に同乗のお、ゆ文えれ

ルると果して大股の女ひ、陸奥「高崎」の妻なる陸奥

個人詩の押版ひあつれのを本が拙傳ひ　れのと知

ルれ、此婦人すかく大略あ、「高崎の推略」も

先ものすると閑閑の面助を信るのかと也思いん

る。

○時代人の婚姻段　森こ言岡お元と　択文れ

能楽と典山が謡曲を甲と乙に雷電という角能の出世物語であつた、聽者は出世という所の文句を引かん、皆真面目に静聽してゐたが、自分は謡曲が果てると、信さんの席に角能を渡すのは皮肉でハあるまいかといふと、新ぢく氣がつき共に笑を源さしたと、典山に次て小さん（一流の落語家）があつたつく〳〵聽いてゐると、何となく黄表紙を読むてゐるうの如き氣がする。若しつうぬ（ぬの訛）の如き流の落語は、から軽のこの不一種の味がある。流の落語を存するのが、落語家の右に大切なる所である。常に考すると今の若い者（中略）が解

十二行

為に移て、落語家が落語を読むと共の教唆を不叶て退席するとて、果然（アッケの取られる様な変き手もあるもの）自分の説明をかくて先づ角能解せしめるが、落語道に於て此の注ハ大なる様扮であると、此の様の落語家が先を言ひなるの、気持り、自分から先を冒犯して多の注を施しとの事哭かつたとい（ひ）るひハ時世が大分（きつて）落語の説教を味ハい得ないことなるべし（四月廿六日の記）

○昨日を初め春雨あきらに降りしきる志めやうる午後の大隈公爵に文明協会の時局演説会を開し畑良太郎の東歌の話を聽受しに、畑ハ三年間スカン

デナビヤの公使をつとめたる人にて、瑞典ノルウヱー、デンマーク、ヒンランド四国の公使を兼任したる其の国状の為にしてなる、特と速記を省略したれども、筆手なる話をさせんとの為め、おもしろい経歴談もあつたが、北欧の事情を明白にするとよ思うてゐるまいが、先方でも日頃日本の真情がとうとうず、飽まで日本を侵略主義の武断国と四国共解してゐて、こんを説明せし其の効ありしことを理解せしめる為めに、我々と三年間を費し、親書を貰ひ新たといふ、全体北の四国の公使を差遣したる一つの目的は露西亞の真情を探らん為めであつた、スカンデナビヤ殊にヒンランドは露西亞の事情を知ることは大変利益な国である、併し四国共に日本を誤解してゐることがて

うて又さて其の誤解を解くことが出来る公使の大切な任務であることを感じたのである、風説こんを含むといふ、さて誤解を解くに其の機会を捉へるけんがうんが等機会が来たしかつた為めに一年以上の歳月を費したといふ、スウヱーデンでは皇太子が親書を聴取る四政治家であり、又三代内閣を組織したブランテンゾと云ふ人は主流なる政治家である、此人が当時其の機会を捉へて東亜の妖雲といふ論文を掲げたのと見ると共に日本が野心を抱いて侵略を主とする様なることをおそれつゝ態と行間にいろく説を陳べたが、一向に先方を動かすことが出来ない、幸ひ日瑞協会といふものがあり、日本公使の名誉会員なり瑞典

相野の石炭が活こんに加わつてゐり、ブランテングも共合
受ひあり、皇太子も舎の御載である所から、折りの艦
れと北海を利用し日本の立場を明うまんとつとめと
が不幸にも皇太子の北が折去さんに為めに、一年ん
うりも皇太子の出席が無つたのでし機会を合をとと
ることが出来なかつたに、その内にワシントン会議が
終了して軍備縮の問題が、ブランテン
グも尚疑を抱き、ある時の演説に日本ハ陸奥宗
艦を残したいかと皮肉を云つた然るに
日瑞協合に皇太子が北の現後初めて出席さる、
ことになつた。北海会議
つたのに、瑞典の有効から、皇太子の出臨御に就て

注意が傾注されたのを見ると、今の演説い政治に海
ることを禁じ又皇太子ら直接御答を求める様
なことがあつたのでし折角出られ
た御有徒労に帰した、保し折角の機会を無
とも思へきひるへと、丁度正倉院の御物を流動宮
真に平に、それを説明かに日本の国情を説明
まで拙し、日本ハ学善(善)善と兵の踏の
を没頭してゐると読き、若者の五箇の兵を機す
ることをも言ひ、日本の立場が理解されず
ハ真の国交ハ徒心なるといふ様なことをそのめう
に北時ひあつて、ブランテングは漸やく理解したら
しく、自分の後ろから軽く肩を打つて、なるも君

の説明を聞くまでは誤解してゐたのだといふて、其の所
以を述べて居る。皇太子殿下も此時分に、
さぞやと云ふ時に殿下も此時分に、自分の宿所へ帰任後
ハ自分もいどくうんしかつた、
二年を経てヤット達したのである、ノルウヱーも六月
同じ誤解を抱てゐた、皇帝の銀婚式に書を日付し
て祝賀に出うけた所、首相が書を相手方の方の話かけ
てゐるから、出を軍人で其の誤解を改めて見ると、日本人
ハ危険だと首相ハ あれからかい出会を云つてゐたとし
て自分ハ まだハ誤解だとのべて 後き出した所、首相を
笑つて一向を受付けなつた、自分掛相の公使ひゝん
ウヰーも久しく滞在して出来ず、終に誤解を徹底的

る所まで行かつたことも遺憾とするが、スカンデ
ナビヤの最強国瑞典だけを理解せしめたのは今後の
国際関係上一の味方を得たと信ずる、他も追々瑞典と
共へて公言得するまでもあるひあるう、兎に角四国の皆小国
であるけれども国際会議の時に隣ひの四票の数とする
のだから、決して軽々に考ふべきものでなく公使を
置くの必要がある、掛持るひ ひ 此位な誤解すら解
くことの困難ひあるを、日本の大震災の報の伝
此時ひ ひ 瑞典だけを別者として丸の国情が知つて多
くの寄附も集つたが、他の国三ヶ国ハ我々と知らざる
き態度であつたのも、必竟瑞典を日本の公使が
ろくに、その関係で国情が集まつた事ひ 解ひ

他の三国も等しく責任の公使があつたらば、矢張り同じ
日清が寄つたびあらう、デンマークで一人の有力者と会
したに、其人とよく〳〵交ふに日本の立場を理解せしむること
は極め困難で無つたのだが、排外の悪しさ、其七傷が
ようとして、北京に不思議な勢力家がある、其人は一私
設の汽船会社長であるから、上下両院の次に北人と
いふもの、ハウスの海名がついてゐる、ある人の勧めも
北人に通つて見ると、北人の後援の表向き主や宰
相などは知らぬことは甚だ迂闊である、自分は本国
の君主にも英国の君主にも無断で其の寝室に
入つて何日も談し且つ電報を得るといふ其の
事の不敬りに出放題と風説のもの、紀水者を向

つて公氣の汚法でもへと云つた所、其人の言ふのは、
しいは無い、あの人は本国の皇室の秘書官をつとめ
てゐる頃の後任の人である、又本国皇室と英国
皇室と親戚関係があるから、バッキンガム宮も任
意に出入する、主意同じといふても多くのことは表
主の意が本となることであるから、其人の進言の多く効
を奏することは不思議いとは云へ、公国うち
小国相互のぬることがあると感じて、時
があつたらば北人と語らうと思ひ、
く道理とは海とはあらうと、表保に程々の
苦心談を語り、今帰る感興を抱くと（四月廿七
日記）

○閑に乗じて図書を通ず、漢人の手に得来たるのみ

一　羽勘三郎図絵　一冊

寛政三年　鶴形屋版　前表三三道

蛇梅亥人編　蘭徳斎画　三才図会に

擬して戯作の書をなしたるもの乃ち天

地現人の三ッに分ち別に関する任

々の事を説き三才図絵に擬したり

り、此書今は稀覯に属す、

一　戯作役者似顔書　早秋亭主人　一冊

文化十五年　十四の画　巻首一九の

序あり、役者の似顔を書くこと海行の如

時勢の千差万別なるが如くにして其優の似顔を画

し四方に書き物をさまざまに変化あり

又、舞台姿態の程好き所を画しあり

各々とるべきことなり

一　玉梓帳　一冊

楊千蔭の画箱を模刻して一帖となす

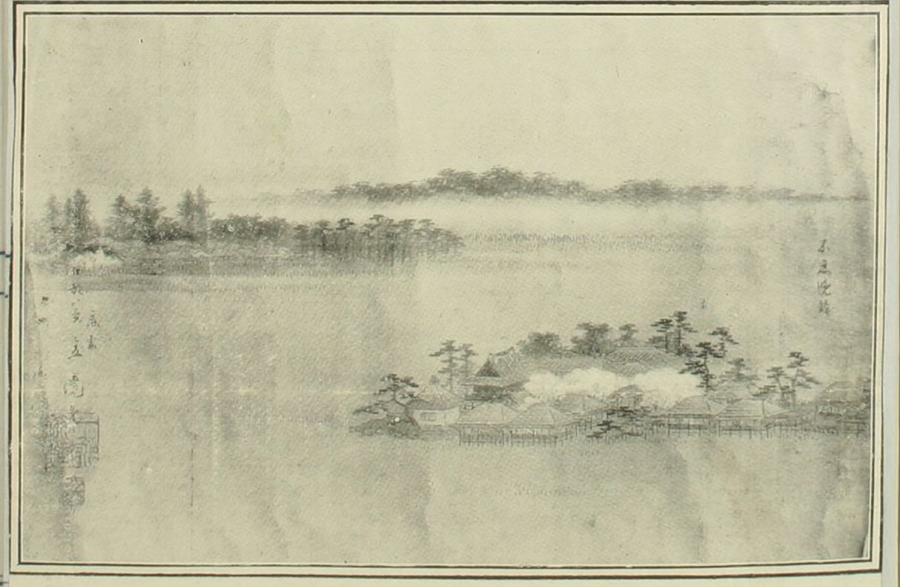
なるものなり、日本橋室元屋の上版にして

巻首に南洲の書したる面影の肖像あり、

傍に大隅守従四位書を

記す、又、月日なし、他の版元帖なるも比し

風味あり、此帖なるものかとなす



一　鍋倉左大臣家集　三冊

この家集の原本のあるを
と長谷古殿今日得かたく此書八頁
寛四年　京都と刊する所也
四月廿八日記

本圖江都八景・富士十二景の原本は現に舊丹波栢原の藩主織田子爵家に珍藏さるゝものにして其由來は當年常陸麻生の藩主新庄駿河の守の姫君が、織田家に入輿さるゝに當り其の生家より持來されたるものなり。翁は所謂浮世繪畫きとは雖も定火消同心の出にして、士人たるの故を以て屢々同家に出入し其囑によりて席上畫を作り或は特別の依囑によりて風景畫を作成して献したるもの而して其作品中の逸品たる本圖は特段なる依囑によりたるものにして翁は其知遇を感し全精力を傾倒し畫き上げたる一代の力作に屬するものにして姫の懇望により姫の手中に入り其手箱の奥に秘められて婚家織田家に移り今日に及びたるものなり、在來同家に此逸品あるを知るもの屢々世に出さん事を薦めたるも現子爵は斷じて之を許さゞりしが偶ゝ弊社主と藝術上の交誼あるを以て今回特に弊社を信じて其發行を許諾されたるものなり。

○今日まで書いた所の紙の記事をそのまま往く陽世の感をもたることがある。本書の刊行は明治五年二月二十一日、第一編を同じ月の紙面即ち三月十五日の記事と各新聞社が東京府廳に出願されたが、新聞の心得の清報を聽うさえたことが無かつたのである。日文四、五日文上の正しい事実を用ゐるは義務上の義務であつて、世流を講じてゐる、此年の八月に成る文部省が図書類を設けたことも記されてゐる。過刊の早稲田文学のうちも切抜きこゝに収めておく

新著三種

『隨筆賴山陽』の印象

高須芳次郎

近世文學史上、明瞭な國民的意識の下に庶民的文學を、小說、戲曲以外に創造したのは賴山陽である。山陽と同じく、漢詩漢文を以て世に立つた文士は少なくないけれども、その大半は唐宋、明淸諸家の詩文模倣に傾いて高踏的、貴族的氣臭に囚はれたのみならず、はつきりした國民的意識を持つてゐなかつた。無論、詞藻、文辭の點で山陽に優つた人たちは往々あつたが、山陽のやうな眞實心と個性とを藝術的に內容上に發揮したものは極めて少かつた。史的文人として文藝批評家として山陽の名がその著書と共にひろく傳へられ、今日も尙ほ一部の人々に渴仰せられつゝあるのは以上のやうな特色を有するからである。

山陽の人物及び文學に關する研究は一時旺んに行はれた時代があつた。それと共に極力彼れを讃嘆するものと手ひどく彼れを非難するものとを生じた。同一の文學に對して、かう是非の差が極端に下される理由は、動反動の原則にもよるが、一つは批評家の見方、態度、趣味などにもとづくのである。また時代の趨勢にもよるところがあつた。それは『八犬傳』の作者曲亭馬琴に向つて與へらるゝ毀譽、褒貶の差が前後甚しく異るのと同じ趣である。馬琴をして文豪の聲譽を得させたのは『八犬傳』であるが、また馬琴をして後世の非難を招かせたのも『八犬傳』である。それとひとしく、山陽は『日本外史』によつて非常に有名になつたが、同時にそれから來る種々の非難を免れることが出來なかつた。彼れを非難するにも理由があれば、彼れを賞揚するにも理由がある、が、その極端に失した批評は、山陽に取つて迷惑であるにちがひない。殊に文藝批評家として美術鑑賞家として靈活、俊敏な眼識を持つた彼れが存外に閑却せられてゐるのに嫌らない。今日は正に山陽に對して公平な批判を與へ、穩當な解剖を加ふべき好機である。

かうした時に市島春城先生の『隨筆賴山陽』が早大出版部から出たのは、私に取つて一の大きな喜びである。私は山陽が好きである。が、それがために山陽の欠點をも美化しようとは思はない。その痘痕は何處までも痘痕として見たい。それと共に

○牧島氏の新著三種
梅屋の評も早稻田文學に掲載されたとのことである
四月廿五日

彼れの美所や長所は冷靜な眼で眺めて、それを誇張することを避けたいと思ふ。在來、山陽に關する論著は過當に彼れを賞揚したり、また冷酷に非難しすぎたやうなものが往々あつて、私をして首肯せしめなかつた。春城先生は、私と略ほ同じ感じを抱いてをらると見えて、最も公平に最も穩當に山陽の眞相を如實に傳へようとする目的の下に本書を公にされた。先生は全體を通じて力めて論評の筆を避け、事實をして自然に山陽を語らせ、また山陽を躍動させるよう、精細な注意を以て山陽を描いてをられる。無論、いくらかそこに先生の主觀や嗜好の閃きが見えぬではないが、大體に於て客觀的な調子が色濃く浮び出てゐる。先づ私はこの點に共鳴せざるを得ない。

先生の賴山陽研究は數十年の長きに亘つてゐる。青年時代、山陽の詩文に傾倒して以來、今日まで、撓みなく、續けて來られた。その間、山陽熱が機分醒めた時代もあつたが、尙ほ研究を中絶しないで、着實に根氣よく山陽の事蹟を探り、詩文を翫賞されたことは、私のやうな移り氣な、短氣な根氣の弱いものに取つて一つの驚異である。從つて本書の內容は、在來出た山陽傳にくらべると一番豐富である。それにつれて新しく發見せられた材料も少くない。卽ち力めて他書にない材料が多く集められてある。そして凡そ山陽に關する事は、どんな微細なことでも、大抵本書に收められてゐる。今迄知られなかつた逸事、逸話が此處にも彼處にも連珠のやうに光つてゐる。が、それは漫然、ならべられてゐるのではない。概して精撰したあとが見える。

本書は隨筆と題してあるが、適確に內容を分類して（一）山陽の生活（二）山陽の文藝（三）山陽の趣味（四）山陽と諸家（五）山陽の雜事（六）山陽の遺跡を訪ふ（七）追錄とし、その間、自然の連絡が附けられてある。決して散漫ではない。天衣無縫のやうに纏りが附いてゐる。唯山陽の呼吸した時代だけが略せられてゐるが、この點は旣に故人森田思軒氏が詳細に描いたことがあるし、山陽の生活した時代は誰れも知つてゐることだから、それが省かれてゐても、格別差支えない。そして春城先生は、山陽好きであるけれども、山陽の美點と共にその欠點、短所をも隱さないで、暖い同情ある筆で描いてをられる。後半生に入つて節儉、蓄財につとめた山陽、金錢にかけて汚かつた山陽が赤裸に出てゐるが、而も讀者がそれを見て些の反感を山陽に向つて抱かぬよう、記されてゐるのは、つまり、先生が山陽を徹底理解してをられる結果だ。思軒氏も山陽の生活を相當に叙述したが、本書ほど深酷でない。そして「山陽の貧富」に於て、その面目が鮮明に示されてゐるのは愉快である。

それから多角的な山陽の趣味も亦本書に於て殘るところなく、紹介せらてゐる。これは春城先生の趣味が廣汎で、ある點に於て、山陽と共通してゐるため、最もよく闡明せられたのだと思ふ。「酒曆」の一篇は酒豪としての山陽を縱橫に描いて、酒

の手紙、酒獵などに及び、一讀、芳烈な酒氣を吐く山陽の豪放な姿が躍如として私の眼前に現はれてくるのを覺える。殊に私が愛誦してやまないのは「山陽の遺跡を訪ふ」の一文である。山紫水明の美を一目の下に收めた山陽の舊居が先生の詳細な叙述と周到な觀察とによつて寫眞そのものゝやうに示されてある。風雅三旺に入つた山陽の生活の一面が、はつきり何人の頭にも印象せられる。

その他、『日本外史』が誕生する迄のいろいろの經緯、詩文、書畫、手紙の上に於ける山陽の特色についても、新材料を加へ、逸文、逸待を收めて說かれてゐるのでそこに自然の新趣が流露してゐる。特に在來の山陽傳が書畫を材料として觀察しなかつたのを先生は多くの書畫を基礎材料として山陽の一面を表明されたところが本書の大きい特色を爲してゐる。且つ桂湖村氏が山陽の詩を精評した長篇が添へられてあるので、詩人としての山陽が一段はつきりして來たのを喜ばずにをられない。殊に美術批評家としての山陽が闡明されたのは會心の至りだ。また「山陽と諸家」の一篇は近世儒學史の材料として尊重すべき記事が往々見える。要する隨筆の形式を以て、山陽研究を集大成したのは本書である。そして山陽の肖像のことから書き起された第一ページから追錄の記事がある六百三十七ページ迄一氣に快續させる興味を何人にも附與するところに著者の人知れぬ工夫と若心とが見える。私は衷心、本書の成功を祝する。尙ほ一言、望蜀の點を述べるとを許さるゝならば、他日重刊の際、はしがきの次ぎへ山陽はどんな時代に生活したかと云ふことを略述されたい。そして『日本外史』の描法を浮世繪に譬へられた警眼を以て外史の內容を今少し評論されたい。また各種の史觀と比較してその見方の特色を明かにされたい。更に文藝批評家としての賴山陽を縱橫に論ぜらるゝならば一段會心である。幸ひに私の微言を採用さるゝならば本懷至極である。

（三月廿七日）

秋田雨雀氏の戲曲集『骸骨の舞跳』についての雜感

武藤直治

秋田雨雀氏の新著『骸骨の舞跳』の出版記念會が某所で催ほされた席上のテーブル・スピーチで、小川未明氏が『秋田君の存在は日本の文壇にとつて一つの良心の存在である』と云つた意味をくり返して云はれた。これは、秋田氏にとつて、何よりも高い名譽の言葉でなくて何であらう。然り、良心！　それを喪なはない幾人の知識階級者が存在するだらうか。秋田氏はこの極めて稀れな、氣高い良心の所有者である。いな、良心そのものである。彼れの存在がすでに良心そのものである。

○雅俗和漢に収むべき語法の材料 思ひ出るまゝ書きつけおく

一 中林竹洞の詩歌清白集

一 日本の古医書に存する性慰法書 支那の[illegible]の[illegible]

一 四朝文学の彫刻師 支那語 黄湖

一 禁令と就て外人の侵入する憐刑

一 鈴山の慣習語

一 禁令と就ての色々

一 当字仮の警醒する

一 中村敬宇の自叙千文

一 八犬士を例句として物以者

一 静子法と流人心法

銅鐵器と瓦器との關係

笹川潔

銅鐵器と瓷器との關係

笹川潔

支那人が一千餘年の古に於て、此の如く精巧なる工藝品を造り上げ、銅と玻璃との組立を成就したことは、支那の窯業の上から注目すべき一の出來事だと私共は考へ度いのである。

今日現存する唐代の瓷器なるものは、多くは所謂唐の三彩と稱せられるもので、中には偶まに五彩のものもないではないが、要するに其の工藝上の道程は、まだ案外幼稚な狀態を脱し切らぬものゝ如く見える。これは一方に七寶燒のやうな精巧な工藝が有つて、巧みに琺瑯を取扱ひ、又た種々の色を其上に現はした技術の儼として存在せる事實に照らし、頗る不審に堪へざる現象である。

支那の古陶に精通する大家連中（例へばホブソン氏を始とし）の云ふ所によると、私共が支那文

（上）

太眞外傳の中に『妃持玻璃七寶杯。酌西凉州蒲萄酒』云々といふ句が有つて、善く人口に膾炙されてゐる。多分唐の玄宗開元年中に玻璃七寶杯なるものゝ存してゐた證明になる譯で有らう。支那人は七寶を以て大食窯と呼んでゐたことがある、大食即ちダアシイとは亞拉比亞の謂で有る。

我正倉院には七寶の古鏡がある、正確のことは判らぬやうだが、支那唐代のもので有らうと云ふ話だ、つまり支那人が大食國人から七寶製造術を傳習し、唐の頃已に支那內地に於て其の製造を開始し、それが偶然にも日本に將來して今日に傳はつたものと思はれる。

化の極盛期に達したと敎へらるゝところの周の時代、學問の上には周易の如き世界の驚異として見做さるゝものを持つてゐた周の時代（後世の作なりとの說なきに非ざれども）幾多の聖賢君子が輩出して、支那哲學の爛漫たる花を開かした周の時代、或は又た法制の上から見て萬世に模範を垂れたところの周の時代、或は又音樂や工藝、就中銅器に於いて精巧の域に進んでゐたところの周の時代、此かる立派な周の時代に、獨り支那の瓷器なるものは、其の總べてが甚だ原始的であつて、僅かに素燒即ち土器の狀態を脫せなかつたと說かれてゐる、之れは實際本當の話であらうか。

獨り周許りではない、漢に入つても、其の前半即ち西漢の世に存在した支那の瓷器は、要するに瓦器であつて、時に裝飾として白堊即ち胡粉を以て彩られたもの、或は自然に窯中の化學的作用から一種の上釉が喰つ附いたものなどが存在せるに過ぎない、さうして轆轤の代りに籠を使用した爲め、往々其表面——時には稀れに裏面——に籠目の跡を遺こしてゐる、これは暹羅や南洋諸島の未開人の間に現に行はるゝところの方法で、支那も矢張り其例に洩れなかつたといふ說が行はれてゐるのである。

漢代の支那人は金石の工藝に驚嘆すべき手腕を發揮してゐる。私は曾て漢口に於て安徽省の徽州附近から發掘されたといふ銅製の太鼓を見た、それは到底北京の武英殿や京都の博物館に陳列されてゐる夫れの如き小さなものでない。目分量で記憶する所では、ザッと其面積約我二疊敷位のもので、其表面の裝飾も亦た至極緻密なものである。此かる立派な靑銅の陣太鼓を鑄造した漢代の支那人、それから今日現に尙殘存するところの漢の碑碣に刻まれた繪畫、凡そ之等の工藝を有した支那人が、獨り瓷器に於て南洋蠻族の製法以外太した進步を持たなかつたといふことは、何うも首肯の出來難い話で、其處にまだ幾許か研究の餘地が有るのでなからうかと思はれるのである。

三代や漢の銅器と稱せられるもの〻中には、直

ちに刀を執つて彫刻を施したもの、或は針の先で直接模樣を付けたもの、即ち瓷器に關する術語からいふと、劃花とか繡花とか名くる風のものも少くない、けれども其の中には又た勿論型によつて紋樣を鑄出したものも甚だ多いのである。然らば其の鑄型は何によつて出來たものであらうか、石を材料としたものであらうか、恐らくは左樣なことはあるまい、矢張り必ず土を主たる材料に使つて練り上げた或物であつたに相違なからう。

若し一方に斯樣な精巧な細工や紋樣を施こした鑄型の存することが、誰しもの頭に容易に理解し得らるゝものとする——甚だしきは歷史の傳ふる所に由ると前漢の時分、柏梁臺上に非常に大きな七人寄つてやつと抱かへることが出來たといふ銅盤を置いた話さへある——开んな大規模の鑄銅すら行はれた他の一方に瓷器のみが、未開人の製法以上に格別進步した形跡がないと斷定することは、餘りに大膽に過ぐる嫌ひがなからうか、私共は之れを問題と思ふのである。

支那人は旣に舜の時代に陶器を作つたと言はれてゐる、三代頃の人民が狩獵の爲に使用した鏃の中には、土を以て造つたものもあり、現に河南邊の地中から發掘されてゐるのみならず秦の咸陽宮や漢宮の瓦と稱せらるゝものは、其紋樣如何にも古雅であつて、旣に瓦を造るに當つても相當に進步した型を有したことが知られるのである、然かし西洋に於ける支那古陶の研究家は後漢以後西域諸國と支那との間に交通が開かれ、埃及から羅馬に傳はり、それから漸次東方に及んだ彼の玻璃の輸入を見るに至るまでは、支那の瓷器を以て極めて幼稚なものと見做して居るのである。

けれども、此の說を打破する爲には、西漢以前に屬する確實な出土品に其妄を證明するに足るだけの外觀內容を備へたものが有るか、或は又た後漢以後のものと見做される釉汁の掛かつた瓷器即ち世に所謂宋窰の壺と稱せられて實は漢瓷に屬するもの、或は又た壺に非ざるも其系統のものが、西域諸國の影響を待たずして早く已に支那固有の

ものとして存在してゐたことを證明するかの外、方法が無いことゝ思ふのである。

玻璃の起源に付ては埃及を元祖とするのが、歐羅巴人の間に行はるゝ通說であるけれども、支那も亦た獨立して自ら之れを發明したのだと云ふ意見もないでない、併かしこれにはまだ確たる材料を持たぬのである。若し支那に於て西域交通以前玻璃の發明が在つたことが證據立てられるならば、今日支那古陶の研究家連が不磨の卓說として紹介する意見も亦た勢ひ改竄を免れざることゝなるであらう。

（下）

支那に於ける玻璃釉は、支那が羅馬其他西域諸國との交通から得た賜物で、其の起りは大凡そ後漢頃に在るのだといふ、是れは支那古陶研究の大家連によつて唱へらるゝ定說である、此外に支那固有の釉藥が有つて、それは粘土と灰とが偶然にも窯中に在て化合する關係から當然思付き得べき

產物だといふのである、即ち支那陶磁源流圖考の著者中尾博士の主張である。

私共は淺學寡聞にして、之等の說を批判することが出來ない、唯だ此に問ひ度いことは釉藥の源流如何に拘らず、支那の古陶に綠色又は青色或は又た黑色褐色の釉汁が最も早く又最も汎く用ひられたのは、其の動機が那邊に在るかといふ問題である、更に精しく言ふと西域から于闐（カウタン）を經由して（スタインの發掘した于闐の瓷器中には上釉の掛かつたものが有る）支那に傳つた鉛釉が只だ單に偶然の事情で改良され進步されたに過ぎない次第で有らうかといふ問題である。

私は之れを解說して、其れは銅器の色或は又た鐵器の色に何等かの關係があるのではなからうかと言ひ度いのである、今一層適切に之れを言ふと古の人が銅や鐵の釉汁を製くつたといふことは、銅器鐵器に憧憬する結果に基く現象で、手つ取り早く言ふと銅鐵の器を瓷器の上に延長したものではなからうかと思ふのである。

私の議論は感想的たるを免れないやうであるが、支那の瓷器を見ると、其形を銅器に取つたものは甚だ多い、漢に在ても唐に在ても、又た宋元に在ても、壺を始めとして香爐や盌の類に至るまで、範を銅鐵の器に取つた例は枚擧に遑あらざる有樣である、獨り其の形狀が左うである許りでない、其の瓷器の裝飾を爲すところの線や模樣やが矢張り銅器其他の金屬器を手本としてゐる、宋の定窰は黑色のものもあり紫色――實は青藍色――のものもあるが、其の大部分は白色である、これは銅器や鐵器に緣遠い色であり、又た其の形狀等に於ても西方の影響を受くることが比較的著明であるのであるが、それですら、其の裝飾に秦鏡や漢鏡の圖案を應用したものは非常に多いのである。

且つ又た支那の古陶磁は、其製法を銅器に習つたと信ぜらるゝ點が少くない、籠目や布目の附いた瓦器の行はれた漢代に於て、左右から半々づゝ型によつたものを繼ぎ合はせた壺も見受けられるやうである、宋や元に入つても此の左右繼ぎ合せの方式や、上下繼ぎ合せの筆法を以て出來上つた花生や盌の類は頗る多い、これは如何にしても瓷器が銅鐵器を模範として發達した左券といふ外ないのである。

既にさうだとすると、漢陶の綠釉を始めとし、晉の縹瓷とか、唐の千峰翠色とか、後周の雨過天青とか、汝窰とか、哥窰とか、龍泉窰とか、官窰とかいふ青瓷類は、其の色の據る所が、矢張り銅の錆即ち綠青に在るのではなからうかといふ想像が起るのである、私は唐代に存してゐた金稜盌なるものに就て、只だ其の名を聞く許りであるが、これも想像次第では、六朝から唐へ掛けて行はれた鍍金の器具に其の動機を得たものでなからうかと思ふのである。

支那人が銅を尊重し、又た同時に銅の錆たる綠青の色を愛することは、支那の文學にも折々散見せらるゝ所である、東坡の句に『碧海磨青銅』といふのがあるのでも判る。

元來銅の錆は綠色が普通だが、時には又た青藍色の斑點や赤色の斑點を呈することも少くない、

ものとして存在してゐたことを證明するかの外、方法が無いこと〻思ふのである。

玻璃の起源に付ては埃及を元祖とするのが、歐

產物だといふのである、即ち支那陶磁源流圖考の著者中尾博士の主張である。

私共は淺學寡聞にして、之等の說を批判するこ

宣德の香爐は金を多量に含むと稱せられてゐるが、其の錆は多く柿紅色を發揮する、而して之れと略ぼ同樣の色が漢及三代の銅器に現れることもある、支那の均窰などは、此邊から其の糸を引張つてゐるのではなからうかとも疑へば疑はれ得るやうに思ふ。

私共の考では、古の支那人が銅器を鑄型に入れて熱火の中で熔冶する間に、偶然の關係で型の內側に美麗な綠色を呈する釉藥が附着するやうな出來事が生じたりして、其處に銅釉を思立つ端緒を開いたのではなからうかと考へるのである、而して鐵釉も亦た爾りである。

本篇は固と雜誌『中央美術』に連載せる拙著『楚月軒瓷話』の續稿として起草せしものなるが、故ありて右へ掲出を見合せ、今回小冊子として印行し汎く大方の敎正を乞ふに至れるもの也。

大正十四年四月

鎌倉、小景庵に於て　著者識

十二行

產業部

閲覧室

十二行